令和元年度

# のじぎく文芸賞

2019 Literary Works

兵庫県・公益財団法人兵庫県人権啓発協会

# 発刊にあたって

県民の皆さん一人一人が主体的に人権について考え、文芸作品の創作や鑑賞をとおして豊かな人権感覚を身につけていただくために実施してきた「のじぎく文芸賞」も、今年度で二十六回目を迎えました。令和の時代を迎えて最初となる本年度は、人の優しさや思いやり、支え合うことのすばらしさ、生命や人権の尊さ・大切さなどが綴られた一、七一四編の作品が寄せられました。これは平成六年の第一回公募以来、最多の応募数となります。この二十六年間での応募総数は二〇、七三三編となります。県民の皆さまの人権問題への関心が高まり広がってきたことを改めて実感せずにはいられません。

この二十六年の間に、少子・高齢化や情報化の飛躍的な進展、人々の価値観や生き方の多様化に伴い、人権課題もますます多岐にわたり、複雑化してまいりました。子どもや高齢者への虐待、学校や職場でのいじめ、セクハラやパワハラ、インターネットを悪用した差別事案など人権侵害は後を絶ちません。

兵庫県では、私たち一人一人がお互いの人権の尊重を感性として育み、日常生活の中で人権尊重を自然に態度や行動として表すことが文化として定着している社会をめざして、「人権文化をすすめる県民運動」を市町とともに展開しているところであり、「のじぎく文芸賞」も、その取り組みの一つです。優秀な作品については、ひょうご人権ジャーナル「きずな」やラジオ番組での人権啓発に活用してまいります。作品づくりをとおして育まれた人権尊重の心が県民の皆さんに広く発信され、人権文化の定着がいっそう図られることを期待しています。

このささやかな冊子には、本年度の応募作品の中から、最優秀賞四編、優秀賞七編を収録いたしました。多くの県民の皆さまにお読みいただくとともに、人権啓発や研修の場でぜひご活用いただき、日常生活での実践につなげていただくことを願っています。

また、多数の作品について、慎重かつ厳正な審査をしていただきました審査委員の皆さまに心よりお礼申し上げます。

最後になりましたが、今後とも「のじぎく文芸賞」をはじめさまざまな啓発事業などを実施し、県民のみなさまの人権意識の高揚や人権文化の創造に努めてまいりたいと存じますのでどうぞよろしくお願いします。

令和元年十二月

兵　庫　県

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

# 令和元年度　人権問題文芸作品「のじぎく文芸賞」受賞者

| | 氏名 | 作品名 | 部門（部） |
|---|---|---|---|
| 〈最優秀賞〉 | 阿部忠彦 | ハリネズミと老人 | 小説（一般） |
| | 髙嶋冴生 | 挑戦と進歩 | 随想（一般） |
| | 松末哲也 | 健ちゃんとぼく | 詩（一般） |
| | パク　ヘレナ | バレンタインとビッグイシュー | 創作童話（一般） |
| 〈優秀賞〉 | 山畑由美 | ユリとラベンダー | 小説（一般） |
| | 兼村琴菜 | 大切な友だち | 小説（学齢児童生徒） |
| | 山野敦盛 | 他人ごとではない | 随想（一般） |
| | 北尾大珠 | 「普通」とは | 随想（学齢児童生徒） |
| | 児玉千佳 | 母であることは忘れない | 詩（一般） |
| | 阪口貴恵 | 言葉のちから | 詩（学齢児童生徒） |
| | 田中　肇 | 自販機トムと仲間達 | 創作童話（一般） |

※創作童話部門　学齢児童生徒の部　該当作品なし

〈佳　作〉


甲斐美奈子　I am Saki.　小説（一般）
蘆田雅子　ペーターの黒靴　小説（一般）
上松敏治　「原爆病」と呼んだ私と「原爆病」と呼ばれた少年　小説（一般）
今北香奈　ぽっとん便所　小説（一般）
宮地娃衣　笑顔の能力　小説（学齢児童生徒）
小野篁　シロップ　トミルク、ドウシマスカ？　随想（一般）
三原良太　僕の人生　随想（一般）
塚口佳子　温かな温かな支えの中で　随想（一般）
舛田新奈　きらり　随想（学齢児童生徒）
吉村隆　ありのいのち　詩（一般）
竹内弘行　一、二の三　詩（一般）
花田大精　一人一人の個性をみんなでつくろう　詩（学齢児童生徒）
山脇容子　アイさんのケーキ　創作童話（一般）
大鳥美佐　まだらの馬　創作童話（一般）
加藤勝　綾乃先生の涙　創作童話（一般）

# 目次

【総評】……審査委員長　林　芳樹……1

【部門別審査講評】……各審査委員……2

【最優秀賞・優秀賞作品】

《最優秀賞》

〈小説部門〉　ハリネズミと老人……阿部忠彦……19

〈随想部門〉　挑戦と進歩……髙嶋冴生……35

〈詩　部門〉　健ちゃんとぼく……松末哲也……40

〈創作童話部門〉　バレンタインとビッグイシュー……パク　ヘレナ……42

《優秀賞》

〈小説部門〉
（一般の部）
ユリとラベンダー……山畑由美……47
（学齢児童生徒の部）
大切な友だち……兼村琴菜……62

〈随想部門〉
（一般の部）
他人ごとではない……山野敦盛……69
（学齢児童生徒の部）
「普通」とは……北尾大珠……75

〈詩　部門〉
（一般の部）
母であることは忘れない……児玉千佳……77
（学齢児童生徒の部）
言葉のちから……阪口貴恵……78

〈創作童話部門〉
（一般の部）
自販機トムと仲間達……田中肇……80

## ◆令和元年度応募作品の内訳

| 部門＼部 | 小説 | 随想 | 詩 | 創作童話 | 応募総数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 一般（高校生以上） | 20 | 90 | 74 | 12 | 196 |
| 学齢児童生徒（中学生以下） | 4 | 1,232 | 278 | 4 | 1,518 |
| 合計 | 24 | 1,322 | 352 | 16 | 1,714 |

## ◆令和元年度審査委員

林　芳樹（総　括）　野元　正（小　説）　三浦　暁子（随　想）

時里　二郎（　詩　）　尾崎　美紀（創作童話）

# 総評

審査委員長　林　芳樹

阪神・淡路大震災のときの話です。被災地の公園でこんなことがあったと、後になって聞きました。見出しをつけるなら「温かい10円玉」です。

公園に公衆電話がありました。電話が通じない被災地で、10円玉が使える公衆電話はつながったのです。だから、身内や友人らへ無事を伝えたい人が長い列をつくりました。

やがて、話し終えた誰かが、使わずにすんだ10円玉を次の人へ渡しました。「よかったら使って」と。受け取った人は次の人へ、さらにまた次の人へ。冷えた10円玉は、手のひらから手のひらへ移るうちに温かくなっていた――という話です。

大震災から25年です。公衆電話の前で生まれた小さな物語のように、震災ユートピア、あるいは災害ユートピアと呼ばれる瞬間が確かにあったことを思い出します。見回せば、つらく重いことばかりの被災地で、人を思いやる雰囲気があったことに、気持ちまでちょっと温まります。

今年の「のじぎく文芸賞」には過去最多の応募がありました。児童や生徒からの応募がたくさんあったからです。活字離れといわれる中でとてもうれしいことです。

小説、随想、詩、創作童話の各部門で、力作の中できらりと光る作品をどう選んだか、何を大事にして判断したか、審査委員みなさんの講評をお読みください。

それぞれの底を流れるもの。その一つは、やさしさです。とげとげしい時代だからこそ大事にしたいと思うのでしょう。自然災害が絶えない中で忘れてはいけないとかみしめたいからでもあるでしょう。

あの温かい10円玉はずいぶん前の出来事ですが、似たような物語が今もどこかにあるのではと思いながら作品を読みました。みなさんはいかがでしょう。

# 部門別審査講評

## 【小説部門】

審査委員　野元　正

《審査総評》

今年度の小説部門の応募総数は、24編でした。その内訳は一般の部20編、学齢児童生徒の部４編でした。平成30年度応募総数20編（一般13編、学齢児童生徒７編）ですから、応募総数はわずかですが、増加しています。ただ学齢児童生徒の部は４名と低調だったのが少し残念でした。しかし内容の濃い作品が多かったと思います。

毎年書いていますが、小説は常識や既成概念を超えてテーマに添った独自の考え方や新しい取り組みなどを通じて生きる力や共感を呼び起こすものです。

各作品の審査は例年通り、「いじめ」「いわれのない差別」「障害」「見て見ぬふり」「虐待」など具体的な現代社会の諸問題を「人の優しさ」「思いやり」「連帯」「励まし」「生命や人権の尊さ、大切さ」などを通じて将来に一点の光明を感じる作品を選んだつもりです。

〈最優秀賞〉

作品名「ハリネズミと老人」　阿部　忠彦

高校２年生直前の俺は、スマホの音がイヤホンから漏れて注意されたことに素直に自分の非を認められないし、部活のサッカーで自分ばかり叱責する監督に手を出そうとして、みんなに止められる。結局俺は、罰として50ｍダッシュ１００回を課せられるが、キャプテンの早田さんや同期の仲間が監督にわびを入れてつきあってくれた。

そんなとき、俺が何故か親切に、自転車置き場のＱＲコード付きカードの使い方を教えた縁で知り合った酔っ払い老人、実は偶然その人は、スマホの音量を注意した人だった。今度は素直にそのときのことを謝ることが出来た。俺は老人に両親に勉強が出来ないと叱られてばかりとか、監督に叱られてばかりとか愚痴ると、老人は自分ばかり怒られていると思ってるんじゃないか、そんなときはハリネズミのように自分への助言や助け船さえ拒絶してしまう。自分のハリで自分の心を傷つけている。今は心を空にして人の意見を聴けと諭され、人の気持ちや思いやりなど相身互いの心を学んでゆく。ハリネズミのように何でも彼でも噛む少年の心は、やがて穏やかさを得る。

これは人の心を思いやることがどんなに大切かを悟らせてくれる作品だ。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「ユリとラベンダー」　山畑　由美

小学6年生の愛美（まなみ）はおしゃべりと勉強が苦手だ。この1週間、不登校だ。

そんなときあるおばあさんと出会い、戦争などいろいろな事情で小学校に行けなかった人たちや日本語の読み書きを学ぶ外国人たちが楽しく熱心に学ぶ夜間中学の存在を知る。

おばあさんは戦争のための貧困などで学校へ行けず、必死で働いて苦難を超えてきたが、自分の名前さえ書けない悔しさにこの夜間中学で必死に学ぶ。その姿に身につまされ励まされた愛美は2週間後に自分の意思で、おばあさんが言う「学びの象徴」のラベンダー色のランドセルを背負って登校する。苦難を乗り越え学ぶ高齢者と小学生のくじけそうな気持ちとが共鳴、交流する暖かさを感じる、将来に光明が見える秀作だ。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）

作品名「大切な友だち」　兼村　琴菜

おとなしくて友だちの出来ない、自分に自信が持てない中学1年生の女の子桃美は、それでも、〈明日には奇跡が起きて誰かと友だちになれることを信じ〉ている。

次の日、桃美は転校生の美野井さんと唯一の友だちになる。美野井さんのモットー「一人一人を大切にする」という思いに感化された桃美は、できるだけみんなと友だちになろうと、努力する。その甲斐があって桃美の友だちは次第に増えていった。

思いやりをもって個人個人を認め、尊重することの大切さをよく伝える作品だと思う。

〈佳作〉

作品名「I am Saki.」　甲斐　美奈子

Sakiは、母との関係がうまくいっていないので、引きこもりがちというか、ものごとをネガティブに考えがちであった。Sakiは自分が変わるために、オーストラリアへ語学留学をする。初めの1ヶ月ホームステイは、その家族と巧くコミュニケーションがはかれず、不穏な空気が漂っていた。ホームステイの終了が近づき、Sakiは大抵の人がシェアハウスに引っ越すことに倣(なら)い物件を探すことにしたが、焦る気持ちで最後の物件に当たった。オーナーNancyは50歳代後半から60歳くらいの人で相手の話を傾聴してくれ人だった。シェアハウスの住人とも気が合った。よく聴いて、相手の思うことを理解し、思いやることが出来る。

相手の孤独と寂しさを解消させる傾聴は新しいテーマとして興味を惹く好編だ。

作品名「ペーターの黒靴」　蘆田　雅子

外国人を「異人」と表現していることにやや抵抗を感じる。しかし、表題『ペーターの黒靴』は靴先が破れ、疲れ切ったヨーロッパの国々から日本そして他国へ亡命への遠い旅路の「労苦」を示すメタファーなのか。うまい。

ナチスドイツの悪魔の手を逃れるため、リトアニア駐在の日本領事「スギハラ」の発行した旅券でアメリカなどの国々へ亡命をめざすユダヤ人たちは、シベリア鉄道経由で日本へ、そして神戸で亡命許可と次の船便を待つところが、歴史的背景をもとに北野町あたりでいわれなき人種差別を乗りこえて、日本の少年とユダヤの少年の三角ベースを通した交流は、巧みに描写されていて、遊びを通じての人種差別の枠をも超えた純粋な交流は、これから世界中の人々が学ぶべきところが大きい示唆に富んだ作品といえよう。

作品名「『原爆病』と呼んだ私と『原爆病』と呼ばれた少年」　上松　敏治

幸彦は中学時代に、広島からの転校生を「原爆病」と呼んでしまった。

その贖罪に苦悩する。主人公「僕」の気持ちがよく描けている。広島の魅力を知ろうともせず、広島すなわち原爆の町と図式的に捉え、すべてをひとからげにしてしまった罪、この罪を一緒と捉える「僕」の気持ちが痛々しいが、いわれのない差別をしてしまった側の差別を受けた側への思いがよく描けている良編と言えよう。

冒頭の幸彦の言葉は、幸彦だけでなく、人類は決して忘れてはいけないことだ、と思うし、結び近くの〈一つ一つの命が大事だから、他の人の人生も大切にしないといけない〉とも思う。好編だ。

作品名「ぽっとん便所」　今北　香奈

若い方の間ではもう知らない人もいるかもしれないが、この作品は、昔懐かしい汲み取り式トイレが作品舞台だ。

クラスの中にいくつかの女子グループがあった。エミはアツコグループから追い出され、マキとカホのグループに入った。そんなとき、マキの教科書がなくなり、「ぽっとん便所」の便槽から見つかった。マキはアツコがエミを脅してトイレに落としたことを知っていたが、黙って教科書なしでテストに挑み、学年1位になり、マキたちのグループの結束は深まる。

この作品は思いやり、憶測、いじめなどに対する多くの教訓が含んでいる。

また意外性に富み読後感が爽やかな作品でもあった。

作品名「笑顔の能力」　宮地　娃衣

「私」服部愛菜の弟は一度聴いた音楽をそのままピアノで弾くことの出来る並外れた才能がある。コミュケーションが苦手な発達障害を持つサヴァン症候群だが、弟の笑顔は魅力的で人を和ませる。その「笑希」がいじめにあうが、「私」はなお一層、「笑希」がいじめられると思い、言い返さず我慢した。やがて、「私」はいじめの加害者が、友だち「金光青空」の弟であることを知る。「私」は「青空」との関係が壊れることを恐れて悩む。

「私は」何も考えないように猛勉強に励む。少しまどろんで起きたら、悲しいよ、寂しいよ、と「笑希」の気持ちを反映したピアノ演奏が聞こえた。「青空」は弟を問い詰め、「笑希」の障害のことも話し、「私」の許しを乞う。いじめを放っておくと、蔓延する。断ち切る必要がある。いじめ側を気づかせるのに笑顔は有力というのは秀逸な見解の作品だ。

## 【随想部門】

審査委員　三浦　暁子

《審査総評》

随想部門には、1322点の応募がありました。そのうち、一般の部は90点、学齢児童の部は1232点でした。多くの作品をご応募いただき、感謝しております。

今年は、令和になって初めての「のじぎく文芸賞」と、なりました。それだけに、とりわけ新たな気持ちで、選考にのぞまなくてはと自分に言い聞かせながら、作品の入った分厚い封筒を開けました。けれども、読み進むうち、令和になったからと言って、人の心が急に変わるはずがないのだと思い知りました。いつの世も、生きているのは大変なことです。思いのこもった作品をひとつひとつ吟味しながら、時に笑い、時に憤り、一緒に涙しながら読みました。何かを必死に訴えようとする作品を前にため息をついたこともあります。それでも、ファイトをもって、困難に立ち向かい、明るい気持ちになる作品も数多くあり、救われました。「のじぎく文芸賞」の作品が、これからも生きる力に結び付くひとつの手助けになったらと願わないではいられません。

〈最優秀賞〉

作品名「挑戦と進歩」　　髙嶋　冴生

作者は、脳腫瘍のため、3歳のときに、視力が低下してしまったといいます。それだけではありません。小学校の6年生のときに、放射線治療の影響で、弱視になってしまったのだそうです。

その頃から、すっかり弱気になってしまい、ドッジボールやサッカー、そして、図画工作なども、自分には無理とあきらめるようになりました。

ところが、そんな作者の心を変えた友達に出会います。下肢の麻痺のため、車椅子の生活ながら、

明るく優しく頑張り屋の彼は、勉強もするし、歩くことや水泳、テニスなど、様々なことに挑戦し続けているというではありませんか。

ハンデがあっても、あきらめない友達の姿に触れ、作者は変身します。以前から心に秘めていた音楽への道に進むことにするのです。簡単なことではありませんが、両親の応援も受け、夢を現実にすべく前を向くのです。

現実を見据え、邁進する作者の正直な心にさわやかな感動を覚えました。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「他人（ひと）ごとではない」　山野　敦盛

作者も引きこもりになった経験を持つと言います。なぜそうなってしまったのか、はっきりとはわからないままに、作者は家から出ることができなくなります。まさか自分がと思いつつ、仕事に行けなくなってしまった作者。その事情を、冷静に、しかも客観的に示す様に、私は悲しみと共感を覚えます。人はなりたくて引きこもるわけはないということも理解できるような気がします。ほんのちょっとしたきっかけで、人は引きこもるものなのかもしれません。

仕事を辞めてしまおうか。いっそ、死んでしまおうか。

一日中、悩み続ける作者の姿は、私たちと無縁なものではないでしょう。

ただし、作者は立ち直ります。きっかけは弟が誘ってくれたドライブでした。どこへ行くあてもなく、ただ知らない町へ行き、ひなびた食堂で食事をする。それだけで、苦しみが軽くなっていったといいます。

人生の危機を乗り切った作者の正直で飾らない告白に救われる人も多いのではないでしょうか？

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）

作品名「『普通』とは」　北尾　大珠

まじめに、ひたむきに、人間の中に巣食う「差別」に取り組もうとした作品です。作者は小学校6年生ながら、冷静に課題に取り組み、「差別」を考えるために必要なのは、「普通」とは何かを考えることだという結論に達しました。

「人間はひとりひとり違う生き物なのだから、ちがっていて当たり前です」の一文に、作者の思いが込められていると感じました。

ただし、これを実現するのは案外、難しいものです。いったい何をしたら、人を傷つけず、互いの違いを認めることができるのか。作者は考え、「おたがい様」という気持ちを持つことが大切だと気づきます。

こうした気づきは、ひとそれぞれ違うでしょう。けれども、違ってこそ、当たり前なのかもしれません。「普通の答え」は存在しないものなのですから。

〈佳作〉

作品名「シロップ　ト　ミルク、ドウシマスカ？」　小野　篁

コンビニエンスストアや居酒屋さんで、外国人の店員さんに会うことが増えています。作者も、コンビニで外国人の店員さんから、アイスコーヒーを買います。ブラックコーヒーにストローとシロップとミルクを添えてと注文したつもりでした。ところが……。ちょっとした言葉の違いで、全部が混ざった状態で渡されます。その時、感じる戸惑いを作者は正直にユーモアを交えて書いています。

けれども、そこへ平身低頭であらわれる店長の態度が、すべてを解決します。

外国人労働者が増えるこれからを見据え、私たちにできることは何かを考えさせる問題提起となりました。
マニュアルで解決しない問題を乗り越えるには、やはり人の力が必要だということを教えてもらったような気がします。

作品名「僕の人生」　三原　良太
様々な理由から、苦しみに満ちた子ども時代を送った作者。ひとりぼっちの魂を満たしてくれるものを見つけることができないまま、高校も中退せざるをえない状態に追い込まれます。
それでも、彼は両親に心配をかけるのがいやで、望まない生活を続け、挙句の果てに、体をこわしてしまいます。闇の中を這うような毎日……。
けれども、20歳を過ぎてから再入学した高校で、作者は生まれ変わります。初めて友達と呼ぶべき人に出会い、これからの人生に希望を持つようになったのです。
「自分の人生の主役は自分」だ。そう高らかに宣言するような作品でした。
人生をやり直すために必要なものは何かを教えてくれる人々に出会えたことを共に喜びたくなりました。

作品名「温かな温かな支えの中で」　塚口　佳子
作者は他人のために尽くしぬいてきた方です。認知症となった夫を笑顔で看病し、パイロットとして働く息子さんへの配慮も欠かしません。さらには、デイサービスセンターで、高齢者のために身を粉にして働いてきました。そんな彼女が大腸がんのひとつである盲腸腫瘍におかされます。読んでいる私までもが、世を恨みたくなります。

ところが、不安にさいなまれる彼女の周囲を温かな人々が取り囲みます。
優しく病気を説明する医師、付き添いをかってでる友達、入院中、空き家になってしまう家をみてくれる近所の方々。こうした方に囲まれているのも、作者がこれまで、周囲に暖かさを注いできたからでしょう。どうか病気を克服し、来年、「元気になりました！」の報告を聞かせていただきたいと願わずにはいられません。

作品名「きらり」　舛田　新奈

小学校1年生ながら、自分の気持ちをしっかり描くことができることを証明したような作品です。
作者の学校では、毎日、クラスのおわりの会で、「きょうのきらり」を発表するのだそうです。
おともだちのよいところを見つけて、報告します。
それはひとつひとつは小さなことです。「トイレのスリッパをならべていました」とか「ほんよみをするときいいしせいでした」とか。
たくさんのきらりが集まって、大きな灯になることを教えてもらったような気がします。

## 【詩部門】

審査委員　時里　二郎

《審査総評》

今年も多様なテーマで、人権課題にとりくもうという意欲的な作品を多く読むことができた。

今回の傾向をあげると、一般部門では、自分の具体的な体験や経験にもとづいた、地に足のついた作品が多かった。とりわけ、親の介護の実際、たとえば日常会話や、日頃の介護の様子を丁寧に描いた作品が印象に残りました。

それに対して、学齢児童の作品は、実体験に基づいて書いてある作品はあるのだが、どこかステレオタイプな型にとらわれがちで、心の中へさらに踏み込んでいくような作品は少なかった。しかし、それにかわって、「言葉」の力について考えようとする作品に新鮮な感性や思考の深まりがみられた。

概して、一般は経験のなかから人権感覚を啓発しようとする傾向、学齢児童は、思考や言葉を使って、人権とは何かを彼らなりに深めようとしている傾向がそれぞれ印象に残った。

〈最優秀賞〉

作品名「健ちゃんとぼく」　松末　哲也

足が不自由で車椅子に乗っている健ちゃんの通う学校で運動会がある。お母さんは、運動ができない彼のことを思って、その日休ませようと、先生と相談している。休ませますと行って帰ろうとするお母さんの前で「ぼくが健ちゃんの車いすを押して走ります」と話しかける。

この作品で、目を開かされるのは次の部分だろう。「健ちゃんは走れない。でも、たったそれだけ。できないことは、ぼくにだってある。／できないなら、どうすれば叶うか考えればいい。」

身体の不自由なことが、みんなとの交流のさまたげになっているなら、どうすれば交流が叶うかを考えようというのである。また、「できないこと」をことさらに取り上げるのではなく、「できないこと」はだれにだってある。それより、いっしょに「できる」ことを考えようとする心の姿勢は、人権課題の解決に向けての大きなヒントを与えてくれる。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「母であることは忘れない」　　児玉　千佳

デイサービスに通う母とその娘である作者との日常のなにげない会話のなかににじむ母への思いや、母娘との心の絆に打たれる。日常生活の不自由や、迷惑をかけまいとする思いによって、しめりがちになる日常も、たわいもない冗談やユーモアでなごませる。ほのぼのとするような母娘の会話に、人の優しさや思いやり、支え合うことの大切さをおのずと思い起こさせる作品である。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）

作品名「言葉のちから」　　阪口　貴恵

子どもたちの作品では、一般の作品とは逆に「言葉」からアプローチしている作品に、印象に残る佳品がいくつかあった。そのなかで、この作品は、「言葉のちから」が人の心をそだて、人のこころを変えていくと、力強く書いていて説得力もあった。

言葉は、架空のもので、一瞬で消えてしまうものだが、「だれかを勇気づけたり、だれかを明るい気持ちにしたりする」。確かに言葉は人を傷つけたりするけれど、同時に、それがきっかけとなって、「自分と向き合って、自分を見直して、他の人の気持ちを考えることができるようになるかもしれない」と考えているところが、実はいちばん大切な部分。人権の尊さを広めたり、深めたりするため

には、このような、人を変える力を言葉が持っていることに気づくことが重要なのだ。「のじぎく文芸賞」もそうした、言葉が「人を変えるちから」を持つゆえに設けられたものなのだということをあらためて思う。

〈佳作〉

作品名「ありのいのち」　吉村　隆

これも言葉のおもしろさを利用しながら、いのちの大切さを発見してもらおうという趣旨の作品。「あり」（蟻）と「あり」（在り）のみならず、「ありえぬほど」とか「ありったけ」とか「ありのまま」とか「ありありと」とか、同音の言葉をまぜこんで、言葉を踊らせながら、「いのち」について考えてもらおうということだろう。第2連の、徐々に高まってくる言葉のリズムの作り方も秀逸。

作品名「一、二の三」　竹内　弘行

母をリハビリテーション病院につれていくために、家のベッドから車まで母を連れていく。それだけのことも一筋縄ではいかないのだ。ベッドの母を起こすところからして「一、二の三」と声をかけ合いながら行い、次はベッドから床へ、これもまた「一、二の三」。介護の実際がいかに大変なことか。それが一日ではすまない。

命の大切さや人権の尊さ、一人一人を大切にと、よく言われることだが、そういう耳障りのよい言葉や目標だけでは、何もはじまらない。命の大切さ、人権の尊さは、このような日常介護のしんどさや苦労なしでは決して実現されないだろう。そんなことを、この詩を読んで強く思った。言い換えれば、そのようなしんどさやつらさのなかから、母の命を感じ、「一、二の三」と、母と言葉を掛け合う時に心が一つになるのを実感し、母の喜びが作者の喜びであると感じられるのである。喜

びや嬉しさという言葉が盛られていないことが、むしろ言葉では言い表せない作者の強い母思いの心をよく伝えている。母の介護の実際の体験からでないと生まれないお二人の様子の丁寧な描写も印象に残った。

作品名「一人一人の個性をみんなでつくろう」　花田　大精

「みんなと同じ」だと安心するという心のなかに、いじめの見えない温床があるということに気づいている。とくに「みんな一人一人違うはずなのに／同じ人なんて一人もいないのに／みんなと違うと、イジメになって／無視したり／だから、みんなと同じだと安心なんだ」という心理は説得力がある。

さらに作者は「個性」の大切さにも気づいている。みんなと違う自分だけの個性を見つけて、それをお互いに認め合うところにイジメはないとする考えも、これからの社会のありようについて明るい展望を開いてくれるように思われる。

## 【創作童話部門】

審査委員　尾崎　美紀

《審査総評》

今年は、残念ながら応募作が少なく、特に学齢児童生徒の部ではこれと思える作品に出会うことができませんでした。毎年、児童の部では思い切ったアイデアの作品や、大人には思いつかないような大胆な発想の作品があって、とても楽しみにしています。今回は、小さくまとまってしまい、力及ばずという結果になってしまいました。来年こそ期待したいです。

その分、一般の部ではバラエティに富んだテーマの作品が集まりました。応募者の年齢が高かったこれまでと違い、今回は若い人からも力作が寄せられました。人権という大きなテーマがあるので、創作の上で少し窮屈に感じるかもしれませんが、広い意味での人権というのは、日常の中での思いやりや、命の大切さを指します。普段の何気ない暮らしの中に、人権という大きな問題が隠れていることを、改めて感じました。

〈最優秀賞〉

作品名「バレンタインとビッグイシュー」　　パク　ヘレナ

ビッグイシューというのはホームレスの社会復帰に貢献することを目指す企業で、同名の雑誌を路上で販売することで自立支援をしています。この作品は、主人公の少女がこの雑誌と出会うところから始まります。本の販売をしている手の不自由なおじいさんとの交流がとても自然で、さわやかでした。主人公は、本の特集にあった「お菓子の作り方」を参考にチョコレートを作り、バレンタインディにおじいさんにプレゼントします。年齢の離れた、暮らしぶりも違う二人の間に優しい時間が流れた瞬間でした。最後の入学式の場面は、ほっコリと心が温まりました。人と人の間には

どんな区別もないという事を教えてくれる作品でした。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「自販機トムと仲間達」　田中　肇

自販機から「カロリーゼロ」ではなくて「いじめゼロ」の缶ジュースが出てきたら……

意表を突かれたアイデアに、思わず笑ってしまいました。いじめられっ子の主人公が、そのジュースを飲んだことで、思わぬ決心をする。自販機にはネットワークがあって、それぞれの情報を共有し合うという、いかにも現代的な設定がうまく機能していました。

ただ、少し最後を急ぎすぎました。枚数制限があるので構成をきちんとすることが大切です。「怒カン」というネーミングのうまさと、最後に明かされる缶の中身のアイデアはなかなかのものでした。缶ジュースの中身を自販機が明かすのではなく、それとなくわからせる工夫がほしかったと思いました。

〈佳作〉

作品名「アイさんのケーキ」　山脇　容子

ケーキ屋を営むパティシエのアイさんは、毎月一回、気になる人のためにケーキを作って届けています。それは、独り暮らしのおばあさんの家や、お父さんを亡くして寂しい少年の家、あるいは忙しさのあまり心の病気にかかってしまった男性のところであったりします。誰からのプレゼントかわからないまま、そっと置かれたケーキは、それぞれの心にポッと灯をともし、また頑張ろうという勇気を与えていきます。ほんのちょっとしたことで、人の気持ちは大きく変わります。ましてや、ケーキのプレゼントなんて、考えただけでうれしくなるではありませんか。どんなケーキだったのか、アイさんはどういう風に作っているのか、知りたいことはたくさんあります。もう少し書

き込んでほしかったと思いました。

作品名「まだらの馬」　大鳥　美佐

誰かと比較して、より以上のものを欲しがるのは、いつの時代も権力者です。真面目に日々の労働をこなし、つましく暮らす者たちは、たった一頭のやせた馬を大切にしていました。

それに比べて、みすぼらしいものは目障りとする王様がとても貧しく見えてしまいました。人や物の価値というのは、それがいかに自分たちを豊かにしてくれるかで決まるということを改めて教えてくれるお話でした。特別豊かではないけれど、人々が親切で温かい国。それこそが真に自由で平等な国だということを、日本の国の偉い方々にも知っていただきたいと思います。よくある善悪のお話と言ってしまえばそれまでですが、この作品からは、貧しくとも芯の強さと優しさを兼ね備えた理想の人間像を読み取ることができます。

作品名「綾乃先生の涙」　加藤　勝

戦後間もないころ、臨時の女先生とのわずかな時間を過ごした子どもたちの、先生への思慕を描いた作品です。戦争という暗黒の時代を挟んで、明るく優しい先生との思い出が、いっぱい詰まった作品でした。今はもう懐かしく遠い時代ですが、なぜか新鮮に感じました。おそらく作者の体験かと思いますが、生き生きとした子どもたちの姿が目に浮かびます。洋服も文房具も十分でなかったはずなのに、子どもたちの感性はなぜあんなにも豊だったのか。

何でも手に入り便利なものであふれた今の時代は、あの貧しく不自由な時代と比べて、本当に自由だったのか、考えてみる機会を与えてくれる作品でした。童話は、子どもたちにも読みやすいように、読点をもう少し多く打ってほしかったですね。

# 最優秀賞

《最優秀賞》

小説部門

# ハリネズミと老人

阿部　忠彦

早朝の新快速下り列車は空いていた。

俺は座席に座るとすぐにリュックを膝の上に乗せ、一枚の地図を取り出した。亡くなる少し前、瀬山さんが書いたものだ。

「頼むよ。兄ちゃん」

これが、瀬山さんの最後の言葉になった。

太股（ふとももと心の痛みを忘れさせてくれる曲なら何でも良かった。激しければ激しいほど痛みに効くに違いない。目をつむったままスマホをいじっていたら、偶然ぴったりの曲に出くわした。俺はボリュームを上げた。強烈な重低音は、早速脳をかき乱し始めた。

俺が高校二年生になろうとする、ある日の電車内でのことだった。

「うるさいのう」

四人がけの前の席から、俺に向けて浴びせられた言葉だ。若い男のようだったが、目を開けずにシカトした。けんかになってもかまわない。殴られたら殴り返すだけだ。

「お兄ちゃん。外に聞こえとるで。ボリューム、もうちょっと下げたりいな」

横に座っていた人に太股をつつかれた。声からすると少し年配の男性のようだった。

俺はポケットの中でスマホをいじって音量を下げたが、謝りもしなかったし目も開けなかった。さっきの男性もそれ以上苦情を言わなかった。

「下手くそ。何本打ったら入るんだよ。お前なんかサッカーやめちまえ」

俺の頭の中には、乗客の苦情や音楽よりも

大きく、監督の罵声が響き渡っていた。電車でなければ頭の中の監督の声を振り払うために、大声で叫んでいたことだろう。
放課後部活、ＡＢ対抗戦。Ｂ組フォワードの俺はシュートを外し続けた。
「林。次外したら五十メートルダッシュ百本」
ベンチからの監督の声は、俺にいっそうのプレッシャーをかけた。
「何で、俺ばかりなんだよ」
毒づきながら、グランドにつばを吐いた。外すのが嫌なら、シュートを打たなければいい。だが、監督はこう続けるに違いない。
「お前フォワードだろう。シュートを打たないフォワードなんて、何の値打ちもねえだろうが」
あのやろう。いつもはベタベタの関西弁なのに、誰かを叱るときだけ関東弁だ。
「監督の指示なんて、走れ、削れ、逃げるなの三つしかないもんな」
チームの仲間とは、いつもそんな話をするが、面と向かっては誰も何も言わない。
後半十分過ぎ、遂にきた。中野が右サイドから上げてくれた優しいロビング。良いタイミングで走り込めた。ドンピシャだ。俺は頭を振った。基本通りゴールラインをめがけて。
だが、ボールはワンバウンドしてバーを超えてしまった。
「おうい、下手くそ林く～ん。約束通りコートから出て走れ。ダッシュ百本」
監督のからかうような言い方に、張り詰めていた糸が切れた。俺は弾かれたように監督めがけて走っていた。何かを考えていた訳ではない。もう制御が効かなくなっていたのだ。
試合をしていた仲間もベンチに居たチームメイトも、俺が走るのを呆然と見ていた。静止画の中で自分だけが動いていた。何かの映画で見たような光景だった。

だが、徐々に大きくなる監督の目は、駆け寄る俺をニヤリと見つめているだけで、椅子から立ち上がろうともしなかった。
「なんで俺ばっかりなんだよ。俺をいじめるしか能がねえのかよ」
俺は監督の胸ぐらをつかんで拳を振り上げた。それでも監督の顔はにやけたままだった。
「くそう」

少年サッカーチームでも、中学でもエースだった。サッカーの名門と言われるこの高校にはサッカー推薦枠で入った。入れたことで自分の実力が評価されたと思った。だが、入学後一ヶ月もすると、俺は自分の置かれている立場が理解できるようになった。チームメイトは一学年約三十人。全部で百人。みんな体も大きく技術も俺より上だった。もちろん、全員が本気で全国大会の頂点を狙っていたし、中には勉強でも国公立を目指している猛者もいた。明らかに、俺は勘違いしていたのだ。

チーム内で練習試合をすると自分が何番目の選手かよく分かった。一年生の二十番目ぐらいだった。五、六人まとめて怪我でもしない限りレギュラーにはなれない。いつの頃からか、いっしょに練習している仲間が怪我をするのを望むようになっていた。最初はとんでもなく心の狭い奴だと自分を責めた。偶然、誰かが足をひねったりすると、俺が祈ってしまったからではないかと心を痛めた。だが、最近では、それも「あり」かなあなどとふてぶてしく考えるようになってしまった。

だから、俺はそんな支離滅裂さの中で、中途半端にしかサッカーにも勉強にも取り組めず、一年間過ごしてしまった。俺は自分自身が大嫌いになっていた。
「林、お前それでよくサッカーやってるよな。ある意味偉いわ。下手くそは辞めた方が良いんじゃねえの。もう、二年になるんだから」

それなのに、監督は俺の心を苛つかせ、貶めることしか言わなかった。

俺は拳を振り下ろす前に、腕を捕まれ監督から引き離された。

「頭冷やせ」

腕をつかんだのはキャプテンの早田さんだった。同じ一年生の数人には、体を押さえられていた。

「すみません。監督。こいつちょっと苛ついているだけですから。俺たちが一緒にダッシュしますから。許してやってください」

監督は右手の甲を俺たちの方へ向けて、ひらひらさせた。向こうへ行けというのだ。俺は、まだ監督をにらみつけていた。監督も目を外さなかった。俺はまたつかみかかろうとしたが、これも阻止された。

「行くぞ」

早田さんの声に促されて、俺は監督のいるベンチとは、コートをはさんで反対側のアップスペースに連れて行かれた。

「金田、お前は俺の代わりにAのボランチだ。キーパーも交代」

早田さんはその間にもチームメイトに指示を出した。

いっしょにダッシュしてくれたのは四人だった。早田さん、中野、上田、岸本。

「お前、殴った後どうなるか、考えてやってんのか」

ダッシュの復りのジョギングの間に、早田さんが話しかけてきた。

「あのとき、あのまま殴ってたら、お前は退学。へたすりゃ傷害罪で警察に逮捕されてたかもしれねえんだぞ」

俺は返事をしなかった。あの瞬間、そんなことまで考えなかった。殴ってやりたいという思いだけが頭を支配していたのだ。

「お前の気持ちは分かるよ」

「俺たちだって、監督を殴ってやりたいと思うことはあるよ。でも、やっちまったらおし

まいじゃねえの」
「お前にだけ、えらく厳しい指導だなって感じたことはあったよ。でも、それに切れてどうするんだよ。俺だって、試合中切れそうになることっていっぱいあるけど、切れてもレッドカードくらって出場できなくなるだけだろう。切れて得することなんてねえよ。みんな辛抱してるんだぜ」
「お前だけならいいよ。一人で解決できるんなら。でも、やっちまったら一人で解決できねえだろう。俺たちの全国大会出場や大学進学にまで関わってんだぜ。今あったことだって、もうネットにアップされてるかもよ。そうなりゃ、一生消えないんだぜ」
　同じ一年生の仲間が口々に言った。
「何だ。あの高校の生徒か。じゃあ、採用無しな。なんてなってみろよ。お前、みんなにどうやって責任とるんだよ」
　熱くなる体とは裏腹に、俺の頭は冷めてきた。早田さんや同級生の言うことはもっともだ。よく分かる。よく止めてくれたと思う。やってしまって警察沙汰になれば、俺一人では済まなかったし、仲間や先輩、家族、学校全体にも迷惑がかかっていたに違いない。止めてくれた仲間には感謝するほかない。だが、冷静になってきても、俺は監督を許す気になれなかった。だったら、俺の気持ちはどうなるんだよ。誰が分かってくれるんだよ。そう言い返したくなるのを必死でこらえて走った。
「じゃあ、俺達、試合に復帰するから」
　三十本走った後、早田さん達はゲームに復帰した。俺は返事をしなかった。黙々とダッシュを続けた。こうなったらやり遂げるしかない。監督は、俺の方を見ているのだろうかと気になったが、絶対に監督の方を見ないようにした。俺にも意地がある。
　七十本目走り終わった後、グランドの照明が消えた。八時になったのだ。明かりは併走して走る国道の街灯のみになった。残り二十

本は涙と汗を拳で拭きながら走った。

夜の九時半。市営自転車置き場の二階から、自転車を押して階段を下りるときには太股の痛みはピークに達していた。これから二十分、自転車をこいで家に帰るのかと思うとため息が出た。

どうにか下りてきて外に出ようとすると、格子状になった入り口の扉の向こう側で、白髪の男性が立ち尽くしていた。どうやら、一時預かりカードに印刷されているＱＲコードを、うまく機械にかざせないようだった。

「どうしました？」

俺は思わず声をかけてしまった。イヤホンを外しながら。

「おっ、お兄ちゃん。これ、なんべんやっても反応せえへんのや。故障しとんかいなあ」

ちょっと酔っていた。

「おじいさん。それ逆ですよ」

格子戸越しに、上を向けたカードが見えた。

「なんや、そうか。ありがとう。あれ？　兄ちゃんの言うとおりしても開かんがな」

「ああ、上下じゃなくて、逆なんです。ええっと、そう裏表が逆なんです」

俺は歯を見せて笑ってしまった。とんでもない機械音痴だ。

「おお、開いた。年取ったらこんなこともできんようになる。難儀なこっちゃ」

老人の言い方は、芝居がかって大げさに聞こえた。

「開かんかったらここで夜更かしするとこやったがな。ありがとう。兄ちゃん優しいな」

老人は近づいてきて礼を言った。その途端、むあっと酒と体臭が入り交じった匂いが押し寄せてきた。

「おじいちゃんは、どうしてあんな匂いがするの」

そう母に尋ねたのは小学校の低学年の頃だっただろうか。

「長い間頑張って、いっぱい働いてきた匂いなんやで」
母の答えに妙に納得したことを覚えている。
「おかしいな」
料金精算機の前で、また老人が首を傾げていた。
「どうしました？」
俺はまた声をかけてしまった。なぜだか分からないけれど、この場を立ち去りかねて老人がすることを見守っていたのだ。
「ああ、兄ちゃん。まだおってくれたんかいな。ありがとう。これ、なんぼやっても料金がゼロとでるんや。故障しとんかいなあ」
そんな。故障するわけないでしょう。俺は言葉を飲み込んで言った。
「何時間預けられました？」
「ううんと。ああ、ビール飲んで、焼酎四杯飲んだからな。三時間ぐらいかな」
「それやったら、きっと無料なんですよ」
「そうか。故障してないんか。ありがとう。ほんまに優しい子やなあ」
俺は優しくなんかない。電車の中で注意されても返事もしないし、素直にボリュームも下げられない。監督に殴りかかろうともした。仲間の怪我を喜ぶような奴だ。それにさっき座っていたのはシルバーシートだ。
「自転車とってきて下さい。ぼくここで待ってますから。出るときもＱＲコードを読ませないと出られませんからね。そのカード、大事に手に持っておいてくださいよ」
俺はこの少し酔っ払っている老人を放っておけなくなってしまった。
「ええ、ほんまかいな。えらい優しい子やなあ。涙がちょちょぎれるわ」
このギャグは亡くなったおじいちゃんがよく使っていた。おじいちゃんのあの頃と同じくらいの歳なのだろうか。
「お待たせやったな。兄ちゃん。ほな頼むわ」

老人は俺にカードを渡してきた。えっ、何で。自分でやらないの？　俺は首を傾げた。
「おっ。兄ちゃん、笑ろたらかわいいな」
いやいや笑っているわけではない。俺はただ老人のあまりの厚かましさにあきれて、ぽかんと口を開けていただけなのだ。
当たり前のことだが、扉は一発で開いた。
「さすが兄ちゃんや。そのカードあげるわ。記念に」
外へ出ると、いきなり老人が言った。
「記念？　えええ？」
これには、さすがに声を上げて笑ってしまった。
「そうや。兄ちゃんとわしが会うた記念や」
今度は二人で声を上げて笑いあった。
「兄ちゃんは、ほんまにええ子やなあ」
「いやあ、ええ子なんかじゃないですよ」
ちょっとうつむき加減に、それでも笑顔のまま言った。
「そんなに優しいのに、何で電車の中であないにとげとげしてたんや。外に聞こえるくらいボリューム上げて。まるでけんか腰のハリネズミやがな」
老人は間近で僕を見上げてきた。
「わし、横に座ってたんやで」
「ああ、迷惑かけて済みませんでした」
不思議なことにこの老人には素直に謝れた。
「ちょっと、部活で監督にどやされて」
「そうか。その監督も兄ちゃんと一緒で、ええ人なんやなあ」
「そんな。監督はええ人なんかと違いますよ」
そこだけは譲れない。
「そうか。そやけど、今どきクビ覚悟で生徒を叱ってやろういうような、気骨のある先生なんて、おらんのんとちゃうか」
「クビ覚悟、ですか？　ぼくをどやすと、なんで監督がクビになるんですか」
「そやかて、高校の部活やったら監督も先生

なんやろ？　誰かが訴えたら、先生はクビになってしまうのとちゃうか」
「ああ、それで……」
「兄ちゃん。ぼくばっかりえらい叱られるって、思ってるんちゃうか」
　俺はうなずいた。
「おじいさん。何で、ぼくがそう思ってるって分かるんですか」
「ええ、聞きたいか。何で分かるか」
「はい」
「それはな……」
　俺は老人の口元を見つめた。
「今日はあかん。酔うてるから」
　俺は、押している自転車を倒しそうになった。土曜の昼じゃあるまいし。そんなギャグはいらない。
「ええええ。それはないでしょう」
　俺が老人受けしそうなリアクションで応えているのに、老人は自転車に乗って、この場を立ち去ろうとした。
「ああ、酔うてるんやから、自転車に乗ったらだめですよ。転びますよ」
　俺は答えのことを忘れて、そう声をかけずにはおれなかった。
「おお」
　老人は背中を向けたまま手を上げた。そして、一メートルも進まないうちに自転車ごと転んでしまった。
「ああああ。だから言ってるじゃないですか」
　俺は駆け寄って老人を助け起こした。幸いどこも怪我をしていないようだった。
「そやから、言うたやないですか。そない酔うてたら自転車なんかに乗れませんて」
「すまんのう。負うた子に教えられとは、このこっちゃなあ」
　意味は分からなかったが、俺に感謝していることだけは間違いないようだ。
　俺は自転車を起こしてスタンドを立てた。
「ぼくがおじいちゃんの自転車を押しますから、一緒に帰りましょう」

「兄ちゃんの自転車は、どうするねんな」
「ぼくの自転車は、どうにでもなりますから」
　自転車より、この老人の方がはるかに心配だ。もし老人が無事に家に帰り着いていなくて、朝刊にでも載っていたら、俺は一生後悔するに違いない。
「さあ、行きましょう。おじいさん、しっかり歩いてくださいよ」
「優しいなあ。涙が……」
「ちょちょぎれますか」
　さっき食らったギャグが口を突いて出た。
　老人は口を開けて笑った。前歯が欠けていた。
「でも、嬉しいです。あんまり人から優しいとか、ありがとうとか言われたことないんで」
「そんなことないやろ。君のお父さんやお母さんは、君が大きく健康に育ったことに、ありがとうって思ってはりますよ」
「いや。ぼく、勉強ができないですから。勉強せえって叱られてばっかりです」
「ははは。勉強はできるに越したことはないけどなあ。長い人生、その気になったらいつでも死ぬほど勉強はできます。まずは健康。なんぼ勉強しても健康は得られません」
　交差点に出た。
「どっちですか、家」
「ああ、カールおじさんの角を左に曲がって、アーケードの中を通ってトウショウのとこを左に入ったとこや……」
「いっぺんに言わんとって下さい」
　覚えられないし、トウショウが何かも分からない。
「ここ、ここ左ですよ」
　トウショウはお好み焼き屋だった。
「ちょっと寄って行くか。親切にしてくれたから、豚玉でもおごるわ」
　だから俺の足はパンパンで、監督の言葉が頭の中に響き渡っていて、今お好み焼きを食べるような気分じゃないんです、と言おうとしたが、いつの間にか頭の中の監督の罵声は

消え、心も少し軽くなっているように思えた。
「また、今度お願いします。今は家に帰るのが先ですよ。まっすぐで良いんですか」
「はい。どこまでもまっすぐで良いんです。でもね、まっすぐ行き過ぎると海に落ちてしまいます」
これも古典的な言い方なのだろうと思ったが、素直に笑った。すると、ふと今日あった出来事を相談してみようかなと思えた。
俺は老人に話しかけた。有効な答えなど聞ける期待もしていなかったのだが。
「どうしたら良いですかね。俺、部活で監督の胸ぐらをつかんじゃって。悪かったなって、今になって思うんですよね。あんなことしちゃったら、もう部活はもちろん学校へも行けそうになくて」
俺は、老人が「大丈夫、監督はそんな心の狭い人じゃないから、何食わぬ顔をしてまた明日から部活にいけば良いんだよ」と、言ってくれるのを期待した。
「そうやなあ。行かれへんわな」
ええっ。行けるって言ってよ。背中押してよ。本当に不登校になっちゃうよ。
「君の性格では」
老人の言葉が途切れた。俺はうつむいてとぼとぼ歩いた。こんな性格なのだ俺は。やってしまってから後悔してドスンと落ち込む。立ち直るのにずいぶんと時間がかかる。分かっているのにやってしまうのだ。
「分かってるのになあ」
老人の頭が肩の辺りで動いていた。一歩進むごとに、あの匂いが押し寄せてきた。
「辞めたらええがな」
唐突で極端な答えが、俺の胸を突いた。
「サッカーも学校も」
予想外の言葉だった。もっと慰めてもらいたかったのに。君の気持ちもよく分かるよとか、大丈夫だから勇気を出しなさいとか。俺は老人に相談したことを悔やんだ。やっぱり、ただの酔っ払いのじいさんだったのだ。

俺はイヤホンを取り出して音楽を聴こうと思った。乗りかかった船だから老人は送り届けるが、もう話をする気になれそうもない。
ポケットに手を突っ込むと、さっき老人に記念にと言って手渡された駐輪場のチケットが、指先に触れた。俺はイヤホンの代わりにチケットを取り出した。何だか、また笑えてきた。
「兄ちゃん。ハリネズミ知ってるか」
老人は違う話をしてきた。
「はい。とげのいっぱいある動物ですよね」
「そう。ハリネズミは身を守るときに体中の針を立てて丸まって自分の殻に閉じこもるんや。電車の中の兄ちゃんは正にハリネズミそのものやった。何もかもシャットアウトして、自分に関わる全てを刺してやろうとしてた。そんなときはなあ、自分への大事な助言や助け船さえも拒絶してしまうんや。敵を攻撃するつもりで出したハリで、自分の心を傷つけてしまってるんやなあ。今大事なのは、殻に閉じこもることやない。ましてやハリを出すことでもない。自分を空っぽにして、ゆっくりと周りの声を聞くことや。兄ちゃん、そない言うたら、明日何をすればええか、答えはでるんちゃうか」
足を止めた。
俺は監督を敵だと思って、自らの殻に閉じこもって、ハリを出し続けていたのかもしれない。監督やチームメイトの助言も最初から聞く耳を持っていなかったのは、自分だったのだ。
「監督さんは、君を待っていると思うよ」
俺は慌てて老人に追いついた。

次の日、俺は職員室に監督を訪ねた。もやもやをすっきりさせようと思った。
「監督、昨日すみませんでした」
「おう。で?」
「教えて下さい。何故監督は俺にだけ厳しいんですか。俺だけ叱るんですか」

「性格や。サッカーするには準備が一番大事。技術や戦術だけじゃなくて、性格もその準備のうちの大事な要素や。いつも何かに突っかかって苛ついてる君にサッカーは出来ん」

監督はわざと俺を怒らせるような言い方をしていたのだと、聞いている内に気がついた。

「分かりました。済みませんでした」

俺はもう一度謝った。俺がチームメイトより劣っていたのは技術や体力ではなく心の方だったのだ。

「どうする。辞めるか？　サッカー」

俺は返事を保留した。もう一度老人に相談してみようと思った。

放課後、俺は老人の家を訪ねた。昨日は分からなかったが、玄関上の表札に「瀬山」と書かれていた。

大声で案内を請うと返事が返ってきた。

「おう、昨日の兄ちゃんか。上がっておいで」

玄関を開けると酒の匂いがした。もう飲んでいるようだ。

「今日、監督と話をしました」

「どや、納得できたか」

「はい。すっきりしました。僕が憎いからあんなこと言っていたわけやないって、分かりましたから」

「で、どうするんや。部活や高校」

「それはもうちょっと考えてみます。監督も結論を出すまでは、部活に来なくてもいいと言ってくれてますから」

「そうか。自分で考えて結論を出すのが大事や。誰かにこうしたらどうやって言われて出した結論は、失敗すると、それを言うた人の責任にしてしまいがちやからなあ」

俺は素直にうなずけた。

その日から、俺は学校の帰りに必ず瀬山さんの家へ寄るようになった。

いつの間にか、玄関の扉を開けて中に入るとき「ただいま」と言うようにもなった。

瀬山さんは、焼酎を飲みながらテレビの前に陣取って、必ず「よっ。兄ちゃんお帰り」と、言った。俺は「お帰り」の言い方で、いまどれくらい飲んでいるのか分かるようになってきた。

「毎日毎日浴びるほど飲んだら死んでしまいますよ」

「ありがとう。でも、酒でも飲まんとなあ。やっとれんときもあるのよ」

そう言うときは、酔っているのにしゃれっ気もなくしんみりというのだった。

俺が高二になったある日、いつものように訪ねていくと、瀬山さんの家を部屋を掃除している女の人がいた。

「ああ、この子ね」

彼女は俺を見るなり笑顔で言った。

「ありがとうね。ボク。瀬山さん、とっても喜んでるのよ。生活にも張りが出来たって。話し相手になってあげてね。瀬山さん。お孫さんみたいでいいわね」

「そや。ええ子やねんで。兄ちゃん、このおばちゃんはヘルパーさん。横山さんやで」

「ボク、ちょっとええか」

横山さんは仕事が終わると、俺を外へ呼び出した。

「気がついてるかもしれへんけど、瀬山さんもうあんまり長ごうないのよ。それが分かってるから毎日浴びるほど飲んでるの」

横山さんは俺の顔を見上げながら続けた。

「身内は誰も居てはらへんのよ。震災で家も子も亡くされてね。早よ、みんなのところへ行きたいと言うのが口癖でね」

瀬山さんは、俺に気を遣っているのだろうか。二人でいるときにそんな話はしない。

「学校はどうや。みんなとうまいことやってるか」

いつもそう問いかけて、俺の答えを聞くと嬉しそうにグラスを傾けるだけなのだ。

「瀬山さん、いっつも気にかけてはるの。死

んだ後のこと。何か、ボクに相談されるかもしれへんから、うんうんって聞いてあげてね」
「はい。そうします」
俺は瀬山さんにお礼をしたいとずっと思っていた。部活には、まだ参加できてはいないが、高校には楽しく通えているし、友達には「お前変わったよな」と、言われている。自分でも素直になれたなと思う。それもこれも全部瀬山さんのおかげだ。
放課後の二、三時間、瀬山さんの話し相手になりながら、宿題をしたり本を読んだりするのが、俺の一番の楽しみになっていった。

七月の初め、いつものように家を訪ねると、居間の座卓の上に一枚の地図が置いてあった。
瀬山さんが寝転んでいたので、手に取って見ていると、
「ああ、それなあ、田舎のわしの先祖からの墓の地図や」
と、寝転んだまま言った。
「どうしたの。今日は飲んでないやん」
「ああ、兄ちゃんに大事なお願いがあってなあ。飲まんと待ってたんや」
「へえ。お願い？　おじいちゃんにはいつも大切なことをいっぱい教えてもらってるから、どんなお願いでも聞きますよ」
「そうか。ありがとう」
瀬山さんは、起き上がると正座した。ボクも慌てて正座した。
「わしが死んだらな。お骨をこの地図のお墓に納めてほしいんや。こうやってな……」
瀬山さんは手振りを交えて、納め方を教えてくれた。俺は少し怖くなってきた。死や墓など自分の身近になかったからだ。だけど、辛抱して最後まで聞いた。
「知り合いになって、まだ五ヶ月ほどしか経ってないのに、こんなこと頼んで申し訳ないねんけどな、いま頼れるのは兄ちゃんしかおらへんからな。聞いてくれるか」

「はい」
俺はすぐに承諾した。自信はなかったが、ここで嫌だとは言えなかった。何しろ、俺を変えてくれた瀬山さんの頼みなのだから。
「良かった。頼むよ、兄ちゃん」
瀬山さんはふうっと息を吐くと、またごろんと横になった。

お盆過ぎに瀬山さんは逝った。俺は約束通り地図を持って列車に乗った。
膝の上のリュックは、実際の重量以上に重く感じられた。瀬山さんの遺骨が入っているからだろう。
姫路駅でローカル線に乗り換えた。
「俺にはまだ固い殻やハリがあるのだろうか」
車窓の緑を見つめながら問いかけてみた。
「兄ちゃん。なんもいま答えださんでもええねんで。毎日そんなことを考えながら、ゆっくり生活するのが大事なんやで」

どこからか、瀬山さんののんびりした声が聞こえたような気がした。

《最優秀賞》

# 随想部門

## 挑戦と進歩

髙嶋　冴生

皆さんは、何かを行動にうつす前に諦めてしまったことはありませんか。

「私にはできない」と思ったことはありませんか。

私は、三歳の時に脳腫瘍で少し視力が低下し、小学六年の夏休みの放射線治療が原因でさらに悪くなり、弱視になりました。その時、急激な視力の低下に弱気になった私は、ドッジボールやサッカーに入れず遠くから見ていたり、図画工作の授業では、勝手に自分ができることの上限を決めて作品を製作したりしていました。病気だから仕方がないんだと諦めていました。

地域の中学校に入学した私は、数人の友達もでき、水泳部に入部し、それなりに生活を送っていました。しかし、技術家庭科や美術の授業では、視力的に少し大変なことがあると、すぐに先生に頼ってしまったり、体育の授業では、球技になると、ボールが見えないからといって授業の手伝いをしたり、レポートを書いたりとあいかわらず「目が悪いから」という理由で多くのことを諦めていました。しかし、少しずつそんな自分を「情けない奴だな」と思い始めていました。

二年になってクラスが変わり、一年の時よりも友達が少し多くなりました。その友達の中に、クラスは違いましたが、下肢の麻痺で車いすに乗っている男の子がいました。彼は、とても明るく、優しく、頑張り屋で、私は「彼と、ずっと、仲いい友達でおれたらええなあ」と思っていました。

ある日、彼が「冴生くんって、最近何か頑張ってることある？」と聞いてきました。私は、「勉強と水泳ぐらいかな」と答え、同じ質問を返しました。すると彼は、何気ない口調で「僕は、勉強はもちろんやけど、歩行とか、テニスとか、水泳とか頑張ってる」と教えてくれました。

私はその答えを聞いて、彼のことを「本当にすごいな！」と思いました。それと同時に、自分のことが、本当に恥ずかしく、バカバカしく思えてきました。「彼は脚が動かないというハンデを背負っているのに、テニス、水泳、歩行とかいろんなこと頑張ってすごいなぁ。ほんま尊敬できる。それに比べて、僕は、目悪いからって、いろんなことから逃げて、何しとんねん！」それからずっと「今まで何しとったんや」と自分の心に問いかける日々が続きました。そして、ある時、ふと、「ずっとこんなこと言っとっても、何も変わらへん。今からでも遅ないから、今までのことを挽回できるくらい、何事にも挑戦せな」という気持ちが湧き上がってきたのです。

そう思った日から私は、目が悪いことを理由に何かを諦めるのではなく、挑戦していくようにしました。実技の授業では、できるだけ自分の力だけで作業に取り組むようにしました。また、体育の授業では、テニスで近距離での壁打ちをしてみたり、サッカーでパスの練習をしてみたりと、少しでも多くボールに触れて練習するようにしました。その結果、中学校を卒業する時には、どの面でも、少しは成長することができたと思います。

視覚特別支援学校の高等部に入学してからも「諦めずに挑戦していく」ということを忘れずに生活しています。ですが、これまでとは違い、同じ障がいのある人と生活しているので、「みんなで挑戦していく」ということを大切に考えています。

私は今、高校卒業後の進路を決めるという問題に直面しています。私は以前から音楽が

好きで、いろいろな歌手の曲を聴いていました。ある時、ゆずさんや秦基博さんの曲を聴いて心が激しく揺さぶられ、その経験があってから、将来はギターを使って多くの人を励ましたい、と思うようになり、高校に入学した頃からは「高校を卒業した後は、音楽の専門学校に進みたい」と思うようになりました。そのことを、周りの大人に相談したりもしたのですが、「何、夢みたいなことを言っているんだ」「もっと安定した仕事に就けるようなことの方がいいのではないか」といった返答が返ってくるばかりでした。

高校一年のある日、私はクラスメイトに卒業後の進路のことについてどう考えているのかを聞きました。友達から現実性のある計画を聞いた私は、進路のことについてどう考えればいいのか分からなくなってしまいました。

「いったいどんな進路を選べばいいのだろうか。自分の耳を生かして、興味のある音楽の道に進みたい。しかし、将来のことを考えると、(1)理療科に進んで(2)あはき師を目指したり、大学に進んで公務員を目指したりする方がいいのだろうか」そんなことを思いながら一年生を終えました。

二年になっても私はその悩みと格闘しながら学校生活を送っていました。以前から両親と進路のことについては話していたのですが、本当の想いはあまり伝えてはいませんでした。しかし、ある日、私は進路のことについてどの道に進んでいけばいいのか迷っているという自分の本当の気持ちを伝えました。すると母は、

「自分のしたいことを頑張ってみたらええんちゃう？　人に言われたことより、自分で決めたことの方が一生懸命頑張れるやん？　もし専門学校卒業してあかんかっても、理療科で学びたいって思うんやったらそのあとで行ったらええやん。若いからやり直しがきくんやし、専門学校で頑張ったら？」

と、言ってくれました。父も、
「お金のことは気にせんでええから、専門学校行きたいんやったら頑張り。」
と言ってくれました。
私は、背中を押してくれた両親への感謝の気持ちでいっぱいになりました。そして、音楽の専門学校に挑戦することを決心しました。
それからの私は、気になった学校に資料請求をし、情報収集をして、何回も親とオープンキャンパスに行き、学校についての情報を集めていきました。最初の方は、どの学校が自分の学びたいことを学べるのか、視覚的に授業についていけるのかなど多くのことで迷い、なかなか選択肢を絞ることができませんでした。ですが、親に相談しながら時間をかけて考えることができたおかげで、今では、志望する学校を一つに絞ることができました。
私には夢があります。それは、ミュージシャンやインストラクターになって、音楽の楽しさとともに、挑戦することの大切さや、障がいを持った人でもたくさんのことができるという可能性を伝えていくことです。世の中には、以前の私のように何かを行動に移す前に諦めてしまっている人や、自分の障がいや病気のことでやりたいことを諦めてしまっている人がたくさんいると思います。路上ライブや、ボランティアでの病院や学校などの訪問ライブを通して、そんな人たちに前に進んでいくための力を与えていきたいです。
今のような私があるのは、何でも相談に乗ってくれた両親や、中学の時に私を変えるきっかけを作ってくれた彼のおかげだと思います。この気持ちを彼に会って伝えたいですが、彼はこの世をもう旅立ってしまったので、会うことができません。もう会えないのは本当に辛いですが、彼への感謝の気持ちを胸に、前を向いて頑張りたいと思います。そしてこの感謝の気持ちを忘れずに、これからの人生

を過ごし、少しずつでも恩を返していきたいです。

高校卒業後の生活は、今以上に困難なことが多くなってくると思います。ですが、「諦めずに挑戦する」ということを忘れず、自分の可能性を信じて、目の前に立ちはだかる壁を越えていきたいと思います。

(1) 理療科……あはき師の資格に必要な専門的な知識・技能を習得するため高校卒業後に進む学科。

(2) あはき師…あんまマッサージ指圧師、はり師、きゅう師のこと。

《最優秀賞》

詩部門

# 健ちゃんとぼく

松末　哲也

転校してきた健ちゃんは、図書館が大好き。
休み時間はいつも本を読んでいる。
色白の健ちゃんは、靴もくつ下もまっ白。
ドロだらけのぼくとはちがう。
今日、職員室の前で健ちゃんのお母さんが先生と話してた。
「健一には無理です。休ませます」来週の運動会のことを話してるみたい。
ぼくの隣で健ちゃんが悲しそうに笑いながら言った。
「健康じゃないのに健一だって。おっかしい」
自分の名前のことをそんな風に言っちゃダメだよ、健ちゃん。
健ちゃんは生まれつき足が動かない。だから車いすに乗っている。
とにかく休ませますから、と言って健ちゃんのお母さんが車いすを押し始めた。
ぼくは、車いすの前に出て健ちゃんのお母さんに言ったんだ。
「ぼくが健ちゃんの車いすを押して走ります。ダンスもぼくが押しながら動きます」
健ちゃんと健ちゃんのお母さんが、同じ顔してぼくを見た。そして、ゆっくり健ちゃんは笑顔になって、後ろのお母さんに言ったんだ。
「ママ、ぼく運動会に出たい」
健ちゃんは走れない。でも、たったそれだけ。
できないことは、ぼくにだってある。
できないなら、どうすれば叶うか考えればいい。

健ちゃん、図書室が好きだから運動場に行かないって言ってたのは、ほんと？
健ちゃん、日焼けしたくないからって言ってたのは、ほんと？
ぼくは、健ちゃんと遊びたいんだ。
あしたの休み時間、ぼくと運動場で遊んでくれる？
健ちゃんは、笑顔でうなずいてくれた。

《最優秀賞》

# 創作童話部門

## バレンタインとビッグイシュー

パク　ヘレナ

さやかは小学校六年生。私立中学の入試に合格しました。その手続きの帰り道、ＪＲと私鉄の駅をつなぐ陸橋に、おじいさんが立っていました。一月の、雪が降る日でした。

「お母さん、あの人、寒くないのかなあ」

「ああ、あの人ね。ビッグイシューという雑誌を売っているのよ。ホームレスの人でね。ビッグイシューは、お金がなくて家で暮らせない人たちを、応えんする団体が作っているの。雑誌を売った利益の一部が、ホームレスの人の収入になるのよ。それで生活を立て直して、ホームレスを卒業した人もいるのよ」

「ふうん。じゃあ、一冊買っても良い？」

「もちろん」

さやかが、おじいさんに声をかけました。

「すみません、一冊ください」

「ありがとうございます。どれが良いですか？」

おじいさんの後ろには、ずらりと雑誌が並んでいました。

「私、六年生なんだけど、読めるものはありますか？」

「おじょうちゃんは、どんなことに興味があるのかな？」

「うーん、何かなあ」

並んでいる雑誌は、どれもふだん読んでいるものと、ちがっています。

お母さんが、思い出しました。

「さやか、バレンタインのチョコレート、友達に作ってあげるんでしょ？　卒業してお別れする前に、みんなにプレゼントする、って

言ってたじゃない」
　さやかの顔が、ぱっとかがやきました。
「そうだった。おじいさん、おかしの本ありますか？」
「おかしねえ」
　おじいさんが並んでいる雑誌をながめました。
「あ、そうだ、お料理のレシピ本ならあるよ」
「おかしのレシピも、のっていますか？」
「中味は見ていないからねえ。見てみるかい？」
　そう言って、おじいさんが、ふうを開けようとしました。ところが、手がブルブルとふるえて、うまく開けることができません。
「すまんねえ。ちょっと待ってておくれよ」
　おじいさんが、ふるえる手で一生けん命セロファンをつかもうとするのですが、指の先がうまくセロファンのはじに引っかかりません。
「大丈夫ですか？」
　そばで見ていたお母さんが、そうっと手助けしました。
「ありがとうございます。若い時に病気をしたものでねえ。よし、これで中を見ることができるぞ。おじょうちゃん、はい、どうぞ」
　おじいさんが、さやかに本をわたしました。
「おじいさん、病気のせいで、お仕事ができなくなったんですか？」
　お母さんが、心配そうにたずねました。
「え、まあね」
　おじいさんは、苦笑いしました。
「おじょうちゃん、そのレシピ本はどうかな？」
「おかしの作り方も、のっているよ。それに、料理だけじゃなくて、人生相談もあるんだね」
「ああ、それはビッグイシューで人気のコーナーでね。販売員が読者の悩みにアドバイスするんだよ。『ホームレスのアドバイスなんて、運気が下がる』って言う人もいるけどね。毎号、楽しみにしているお客さんもいるんだ

よ。面白いだろう？」
「おじいさん、私、このレシピ本にする」
「そうかい、ありがとうね」
「寒いから、体に気をつけてね」
さやかは本をカバンに入れて、お母さんと駅へと向かいました。
数日たった日曜日、朝からずっと雪が降っていました。さやかは、台所で本を見ながらバレンタインのプレゼントを作りました。友だちの分を包んだあとも、まだいくつかチョコレートが残っていました。
「あら、余り？　お母さんがもらってもいい？」
さやかは、あわててお母さんをさえぎりました。
「余りじゃないんだから」
そう言って、花柄の紙でチョコレートを包みました。それから、たんすの引き出しを開けて、お母さんが買い置きしていたカイロを取り出しました。
「そんなにたくさん、どうするの？」
「ないしょ、これ、ちょうだいね」
さやかは、紙袋にカイロを入れ、その上に花柄の包みを置きました。
「私、出かけてくる」
紙袋を持ったさやかは、陸橋へと走って行きました。
「おじいさーん、チョコレート、作ってみたから味見してくれる？　それからこれ、家でたくさん余ってるから、あげるね」
おじいさんが、袋の中を見ました。
「カイロはくさらないよ。来年も使えるじゃないか」
「いいの。たくさんありすぎて、じゃまなの。だから使ってちょうだい。毎日、外で立っていたら寒いでしょ。私だったら、一日で風邪をひいちゃうよ。なくなったら、また持ってくるからね」
そう言って、さやかは走り去って行きました。

三月になり、さやかがお母さんと中学校の制服を取りに行きました。帰り道、陸橋にあのおじいさんが立っていました。
おじいさんがさやかを見つけると、笑顔で手招きしました。
「おじょうちゃん、会えてよかった。待っていたんだよ」
そう言って、おじいさんは、小さな包みを出しました。
「これはホワイトデーのプレゼント。中学生になったら使ってもらえるかな」
「おじいさん、いいのに。でも、ありがとう。見てもいい？」
「どうぞ」
包みの中味はハンカチでした。
「こんなに素敵なおくり物、すみません」
お母さんが、申し訳なさそうに頭を下げました。
「おじょうちゃんのカイロのおかげで、今年は風邪をひかずにすんだんだ」
「まあ、さやかったら。そういうことだったのね。おかげで、またスーパーに買いに行ったんだから」
「そうでしたか。お母さんも、ありがとうございました」
「いえ、いえ。風邪をひかなくて、何よりです」
三人は顔を見合わせてにっこりしました。
あっという間に時が過ぎ、四月を迎えました。入学式のあと、さやかとお母さんが陸橋を通りがかりました。ところが、いつもいるはずのおじいさんが、いません。代わりに、貼り紙が、さやかの目に飛び込んできました。
「ここで物を売ってはいけません」
おじいさんは、ここでの販売をあきらめて、どこか別の場所に行ってしまったのでしょうか。
「こんな紙、だれが貼ったの？　ホームレスのおじいさんが、冷たい風が吹きつける中、笑顔で雑誌を売ってるんだよ。だれだって、

住むところと食べる物がないと、生きていけないんだよ。そのために働いていただけなのに」
　さやかの目に、涙があふれかけました。
「せっかくの制服姿を見てもらおうと思ったのにね」
　お母さんも残念そうです。すると、後ろから声がしました。
「入学おめでとう」
　振り返ると、おじいさんが立っていました。
「おじいさん、会えてよかった」
　おじいさんが、にっこりほほえみました。
「制服、似合っているね」
「よかった。お元気だったんですね」
　お母さんも、ほっとした様子です。
「春は始まりの季節だからね。私も新しく仕事が決まったんだよ。事務所を手伝うことになってね」
「本当？　新しいお仕事は、手がふるえてても、大丈夫なの？」
「給料は安いけどね。暖房も冷房もきいている部屋で、仕事をさせてもらえるよ」
「よかったあ。じゃあ、もう会えなくなるんだ。だけど、おじいさんにとっては良かったね」
「今日は会えてうれしいよ。おじょうちゃんに、お礼が言いたかったんだ。おじょうちゃんのおかげで、『もう一度がんばってみよう』って思えたからね」
「そんな、私、何もしてないよ」
　さやかが照れくさそうに、うつむきました。
「お体に気をつけてお過ごしくださいね」
　お母さんがおじいさんに声をかけました。
　どこから飛んで来たのか、桜の花びらが、おじいさんとさやかの肩にまい降りました。
「桜も、私達の門出を祝ってくれているようだね」
　三人がお互いを見合って、にっこりしました。

# 優秀賞

《優秀賞・一般の部》

# 小説部門

## ユリとラベンダー

山畑　由美

「いらっしゃいませ、二名様ですね」

人気アイドル似のかわいい店員さんが、愛美とお母さんを迎えました。二人が立ちよったファミリーレストランは、お昼時を過ぎていたのでお客さんはまばらです。

席に着いた愛美はうつむき、お母さんは肩がこった、というように何度か首を回しました。

「おなかすいたね、愛美。先生の話、ちょっと長かった」

愛美は答えず、大きな窓から外に目を向けました。

今日は土曜で学校は休みです。愛美は、担任の松原先生から呼び出され、お母さんと一緒に学校へ行った帰りでした。

ここ一週間、愛美は学校を休んでいます。毎朝、頭とおなかが痛くなり、登校できなくなるのです。

心配した先生から、「一度お話しませんか」と、家に電話があったのは昨日のことでした。

誰もいない土曜の学校にお母さんと一緒なら、と一週間ぶりに訪れました。校舎の二階に上がると六年一組の教室の戸が開いています。

「こんにちは。失礼します」と、お母さんが中にいる先生に声をかけ、愛美はその後に続いて教室に入りました。

「太田さん、こんにちは。体調どう?」

待っていた松原先生が立ちあがり、愛美の方を見ました。いつもはジャージ姿の先生が、今日は白いブラウスに黒のスカート姿で

す。
（体調は悪くないです。でも今度いつ頭やおなかが痛くなるか心配です）
愛美はそう答えようとしますが、言葉が出ず、唇をきゅっと固く結びました。
こんな時、愛美は心の中にすうーっと冷たい風が吹くのを感じます。自分の気持ちを伝えようとすればするほど言葉につかえるのです。
松原先生は、愛美の表情を見ながら話します。
「今週、プールが始まってね、一年生との仲良しプールもあったんだよ。一年生といると六年生って体が大きいね。六年間でこんなに成長するんだな、ってみんな自分でも思ったみたい」
ちょっと間をおいて、「太田さんはどうかな。何かクラスで困ったことがあるの？　話せそうなことだけでもいいから教えてほしいな」と、愛美に顔を寄せました。先生からグレープフルーツの香りがしました。
愛美はおしゃべりが苦手です。言いたいことがあふれたり、逆に何も浮かばなかったりして、黙ってしまいます。でも、愛美の話をゆっくり聞いてくれる友達はいます。だから学校が嫌いではありません。心に重くのしかかるのは、勉強がつらくなってきたことです。学年があがるごとにわからないところが増えます。でも、どこがわからないのかがわからないので質問できません。恥ずかしくて、それは誰にも言えずにいました。
勉強できない自分は、ダメな子。そんな思いが胸の中で灰色の雲のように広がり、一層無口になるのでした。
「太田さん。これは今週勉強した内容の宿題です。教科書を見てやってみてね。それから、クラスのみんなからのお手紙です。月曜の予定と持ち物も友達が書いてくれたよ」
先生はプリントの束を愛美に手渡しました。一番上に、七色に塗られた予定表が閉じ

られています。（太田さん、早く元気になってね）というピンクの文字が目に入りました。（病気なわけじゃないよ）。愛美は後ろめたい気持ちで、心がちくっとしました。

「先生はお母さんと少しお話するので、図書室で待っていてくれるかな？」

愛美は黙ってうなずき、校舎の一番はしの図書室に向かいました。がらがらと引き戸をあけると、本の香りがします。貸出カウンターから自分の図書カードを出してみました。

（わたしの字、下手だな……）。カードに記されたのは『赤毛のアン』。仲良しの榎本さんから勧められたけど、物語が長すぎて最後まで読めていません。本をたくさん読めて、おしゃべりも運動もうまくなりたい。榎本さんと『赤毛のアン』の話をしたい。いくつもの思いがしみのように心に広がるのでした。

「お待たせしました。ハンバーグランチです」

さっきのかわいい店員さんがテーブルに食事を運んできました。

「さあ、食べよう。先生の前でおなかがぐうぐう鳴って恥ずかしかったよ」

お母さんは、黙り込む愛美の分までおしゃべりを続けます。愛美はそれを聞き流しながらハンバーグをほおばり、通路をへだてた隣のテーブルに何気なく目を向けました。

白髪のおばあさんが一人で何かを鉛筆で書いています。椅子の脇には、ユリの花柄の手提げバッグと杖。

「おばあさんが勉強？　なんで？」

愛美は不思議に思い、おばあさんの手元を見ました。見覚えのある猫の絵のついた漢字ドリル。愛美が学校で使っているものと同じです。「なんでおばあさんが六年生のドリルをしてるんだろう」

おばあさんはしわだらけの手で、ゆっくり、丁寧に、漢字を書いています。テーブルの上

は消しゴムのカスがいっぱいです。「あんなに丁寧に書いたら、きっと先生に花丸がもらえるな」愛美は食べ終わるまでちらちらとおばあさんの方ばかり見ていました。

食事が終わって席を立った時、愛美はおばあさんの足元に落ちていた赤鉛筆を見つけて拾い、「これ、落ちています」と、おばあさんに手渡しました。「まあ、ありがとうございます」。顔をあげたおばあさんはにっこりしました。愛美は（なぜ漢字ドリルをしているのですか）と聞こうとしますが、緊張して声が出せません。すると、おばあさんが察したように話しかけてきました。

「お嬢さん小学生？　何年生かしら？」

「ろ、六年です」

「そう、六年生。私も学校に通っているのよ。今、六年生の漢字を勉強中なの」

おばあさんは、猫の絵のついた漢字ドリルを愛美に見せました。「がっ、学校に行ってるんですか？」と愛美は大きな声で聞き返しました。「愛美、失礼よ。帰ろう」お母さんに促され、愛美はさよならと小さくお辞儀をしてその場を後にしました。

（おばあさんが通う学校ってどこだろう）

愛美は家に帰った後も気になって仕方ありませんでした。今日、松原先生から渡された宿題プリントの中から漢字練習を取り出して、新しく習う「優」という漢字を書いてみました。おばあさんのまねをして、ゆっくり丁寧に。

（おばあさんの消しカス、すごかった。私はあんなに何度も書いたり消したりしない）

手鏡をのぞくと青白い顔がこちらをじっと見ています。「私も学校に行っているの」と言ったおばあさんの嬉しそうなピンク色の顔と交錯し、愛美はぎゅっと目を閉じました。

月曜、愛美は学校を休みました。

時間割を合わせて、行く準備はしました。

でも、プリントはほとんど手つかずで先生にあわせる顔がないし、心配して手紙をくれたクラスの友達にも何と言えばいいかわからなかったのです。

いつも愛美の話をきちんと聞いてくれるお母さんに心配をかけたくなくて、心の内を話せません。夕方、仕事から帰ったお母さんに、「愛美、ちょっと外に出ようか」と声をかけられ、一緒に買い物に出ました。

「愛美、今日はもう一度、お母さんと一緒にプリントやろうか。少しずつでも大丈夫だから」

お母さんは歩道でそう言うと、「さあ、今日のメニューは何にしようかな」と愛美の腕を取りました。しっとり柔らかいお母さんの腕が愛美の腕に巻きついた瞬間、愛美はこれまで感じたことのない、まとわりつく不快さを感じました。

その時です。横断歩道の向こうに、あのファミレスの白髪のおばあさんが立っているのを見つけました。ユリのバッグを手に杖をついています。

「お母さん見て。あのおばあさんだ、ほら」

信号が青に変わり、おばあさんはゆっくりとこちらに歩いてきます。愛美はお母さんの手を振りほどいて、おばあさんに駆け寄り、「こんにちは。ファミレスで勉強していたおばあさんですよね」と、声をかけました。自分でも驚くほどはっきりと声が出ました。

「ああ、六年生のお嬢さん」

「あの、学校ってどこですか、おばあさんは本当に学校に行っているんですか」

愛美は矢継ぎ早に聞きました。

「愛美、こんなところで失礼でしょ。やめなさい」。お母さんはすみませんというふうに頭を下げて愛美を制しました。

「私、今からその学校に行くところなの。興味があるなら一緒に来てみる?」

愛美は目をまん丸くさせました。「今から? 一緒に行っていいんですか?」

「愛美、やめなさいったら」
お母さんは、とんでもないというふうに愛美の腕をひっぱります。
「お母さん、大丈夫ですよ。学校はすぐそこだし、少しのぞいて見られたら」
おばあさんは穏やかに言いました。
「お母さん、私、行ってみたい。どんな所か見たい。いいでしょ？」いつも無口な愛美が目を見開いて自己主張をしたので、お母さんは驚いて「わかったわ。じゃあ、お母さんも一緒に行くわ」と渋々承諾しました。

学校はすぐ近くでした。笹野中学校。
「ここって……私の……」そこは来年、愛美が入学する予定の中学校です。戸惑う愛美たちを尻目に、おばあさんは校舎に入ります。愛美とお母さんもあわてて後に続きます。
キーンコーンカーン。チャイムが鳴りました。一階の一番奥の教室に入ると、大人が十人ほど席についていました。

「あれ、やす子さん、今日は孫さんと一緒なの？」派手なTシャツを着た金髪の女性がおばあさんに声をかけました。
「孫じゃないのよ。今日は私の専属の先生として来てもらったの」
おばあさんはニコニコしながら、隣の席に愛美を座らせました。
「お嬢さん、ここはね、夜間中学というんですよ。あなたぐらいの歳のころに十分に勉強ができなかった人たちが通っているの。私もそう。戦争の後、学校に通えなかったのよ」
おばあさんはそう言うと、愛美に「今日は私の勉強を手伝ってくれますか？　よろしくお願いします」と頭を下げました。
「まだ名前を聞いていなかったわね。私は佐々木やす子と言います。八十一歳です。こんな年になるなんて若い時は考えたことなかったのよ。びっくりよね。で、あなたは？」
「太田愛美です。小学校六年生、十二歳です」
「はい、では、はじめます。みなさん。こん

ばんは。おや、今日はずいぶん若い生徒さんがいますね」
　灰色の髪をした男の先生が教室に入ってくるなり愛美を見て声をかけました。
「先生、私の若いお友達、太田さんです。今日は勉強を教えてもらおうと思って一緒に来てもらいました」と、やす子さんが説明しました。
「そうですか。若いお友達とは素晴らしいですね。佐々木さんの勉強にさらに磨きがかかりますね。それでは数学を始めましょう」
　愛美は数学と聞き（本当の学校なんだ）と緊張して、背筋がぴっと伸びました。
　大人が、小学生の自分と同じように教室で授業を受けること。先生がちゃんといること。学校が夕方から始まること。なぜなのかわからないことだらけです。
　やす子さんが、「これを使ってね」と鉛筆を愛美に渡しました。鉛筆けずりでではなく、ナイフで削ったようでした。今日の勉強に向けて準備をしているやす子さんの姿が目に浮かびました。
「今日は分数の足し算です。２／３＋１／５＝　これをやってみましょう。この問題は少し難しいかもしれませんが、皆さんはこれまでの経験がありますので色んな考え方を使って解いてみましょう」
　先生が黒板に数学の問題を書きます。
　愛美は、分数の足し算ならちょっと自信がありました。早速、やす子さんに教えようとすると、やす子さんは「これは約分をするかな。こうかな。難しいな」と、ひとりごとを言いながら、一生懸命、自分で考えています。愛美はじっと待つことにしました。
　愛美は教室をそおっと見まわしました。他の人たちもお互いに小声でヒントを出し合ったり、先生を呼んだりしながら真剣に取り組んでいます。「先生、もう一回家でやるから、まだ消さないで」と黒板の問題を写している人もいます。

愛美は、学校で授業を受ける自分と重ね合わせました。算数は苦手なので、先生が説明をしている時はたいてい、校庭で体育をしている様子を窓からぼんやり眺めています。先生の目を盗んでちぎった消しゴムを投げ合う男子や、姿勢が悪くだらだらする女子もいます。

「同じ授業を受けていても全然ちがう」

愛美は、やす子さんの教室に満ちる活気に居心地のよさを感じました。

その夜、夜間中学から帰った愛美はひとりで考えました。

お年寄りが多かったけど、みんな楽しそうだったな。やす子さんだけじゃなくて、ほかの人も字がきれいだった。先生にどんどん質問をしていた。

愛美は、授業が楽しいなんて思ったことがないのです。なのに、夜間中学の人たちはあんなに楽しそうにしている。愛美は、その光景をまぶしく感じました。なぜだろう。もう一度、やす子さんに会って聞きたいと強く思いました。「なぜ大人なのに学校に通っているのですか？　勉強が楽しいのですか？」と。

翌日、愛美はお母さんの許しを得て、再び笹野中学校を訪れました。やす子さんにもう一度会うためです。

夕方五時半、校門で待つ愛美の前にやす子さんが現れました。愛美は待ちきれないというように質問を投げかけました。「やす子さんも、ほかの人も、なぜ学校に通っているのか、私、どうしても聞きたくて」

やす子さんは、ああという表情をすると、「今日はこれから授業だから、すぐには答えられないわね。もしよかったら、今度うちに遊びにいらっしゃい。お母さんと一緒にね」

そういうとバッグからメモを取り出し、電話番号を書いて愛美に渡してくれました。「いつでもどうぞ。私はだいたい家にいますから」

お母さんがやす子さんに電話をして、土曜の午後にやす子さんの家に行くことになりました。

やす子さんの家は、愛美の家から歩いて十分ほどのところです。シャッターが閉まった建物の脇にドアがありました。ドアの脇にあるインターホンを押して、「こんにちは。太田です」と愛美が呼びかけると、「どうぞあがってください」と、返事がありました。

ドアを開けるとすぐ階段です。靴を脱いで上がっていくと上から声がします。

「階段が急ですべりやすいから、ゆっくりあがってください」

愛美は「ほんとに急だな。やす子さんは杖をついているのに大丈夫なのかな」と気になりました。

二階の引き戸を開けると、小さな部屋と台所がありました。「狭いけど、お入りください。お客さんが来ることはあまりないから緊張するよ」とやす子さんは照れ笑いをしました。部屋の真ん中に小さい食卓があり、ソファーは薄いピンクのユリの花柄です。愛美は「バッグもユリの花柄だし、やす子さんはユリが好きなんだな」と思いました。

奥に仏壇があります。飾られた写真を見ると旦那さんのようです。家具は少なく、ひとり暮らしのようです。食卓に国語辞典や地図帳が置かれていて、勉強を頑張っていることがわかります。

やす子さんは台所で麦茶を入れ、「何もないけど、どうぞ」と言いながら、一人用のいすにゆっくり腰掛けました。

「さてと、愛美ちゃんは私がなんで学校に行っているのか聞きたいんだよね。話はちょっと長いけどいいかな」と前置きして、やす子さんは話しはじめました。

前の戦争を知ってる？　あの時の空襲で私の家は全部焼けたの。戦争が終わった時、私は七歳。親はいたけど、貧しくて食べるもの

も寝るところもなかった。拾ったジャガイモを兄弟で分けて食べてたのよ。

九歳の時に小学校に入ったんだけど、そのうち給食代が払えなくなってね。先生が「今日は給食代持ってきたか」っていつも言うから、恥ずかしくて学校に行けなくなってしまったのよ。

学校を辞めてから必死に働いた。縫製工場でアイロンかけとか、解体会社でゴミと木と鉄を分ける仕事とかね。

十九歳で結婚して、子どもは三人育てたの。この部屋の下のシャッターが閉まったとこで昔、魚屋をしていたのよ。亡くなった主人と一緒にね。毎日、朝早くから市場に行って夜遅くまで働いた。

一番つらかったのは、文字が読めず、自分の名前も書けないことだった。

子どもが学校から持って帰る手紙がわからない。勉強を教えてあげられない。PTAの役員になってと言われたこともあったけれど、「字が読めないから」と言えずに、「仕事があるから」って断った。そのうち、子どもたちが大きくなって私が読めないものを読んでくれるようになった。うれしかったけど、ずうっと社会から取り残されている気がして悔しかった。

一番下の娘から、夜間中学というのがこの近くにあるよと教えられたのは、今から五年ほど前。でも、この歳で学校に行くのは恥ずかしいし、ものなんか覚えられるのかなと不安だった。三年くらいずっと悩んだのよ。

決心したのは七十八歳の時。ほら、愛美ちゃん、見たでしょう。先生たちが優しいのよ。みんな私より年下だけどね。

やす子さんはぺろっと舌を出しました。

愛美は、隣に座るお母さんが今にも泣きそうな顔でハンカチを握っているのに気づきました。やす子さんは続けます。

あの学校に通うのは、みんな子どものころに何か事情があって勉強できなかった人なの。だいたいの人は昼に働いて、夜に勉強に来るの。だから夜間中学。

金髪の女の人がいたでしょ。あの人は子どものころ、重い病気で学校に通えなかったんだそうよ。

外国の人もいたでしょう。中国と韓国の人。日本語が十分にわからないお年寄りが多いの。会話はできるけど読み書きができないのね。みんな熱心だよ。時々、その人たちから中国語を教えてもらうけど、難しいよ。全然覚えられない。なのに、あの人たちは日本語を一生懸命学んでる。尊敬するわ。

私は日本語はわかるけど、話すことと書くことは全く違うということがわかった。自分の思いを文字で書けるってすごいよ。だって私が今、話した言葉は、ここにいる愛美ちゃんやお母さんの心に少しは残るかもしれないけど、さらさらってこの場で消えてゆく。でも、紙に書いた言葉は残って、今ここにいない私の娘たちや孫たち、全然知らない人が読むことがあるかもしれないでしょ。

授業で知らないことを教わっても、よく理解できない時もあるのよ。でもそんな時は、わかることができるチャンスが来たんだって思うようにしてるの。

（わからない時は、わかるチャンス）

その言葉は、愛美の心にこれまで感じたことのない強い風を起こしました。

「愛美ちゃん、ランドセル持ってるでしょう？」と、やす子さんからふいに尋ねられました。

「あっ、はい」

「あなたのランドセルは何色なの？」

「ラベンダー色です」

「まあ、素敵な色ね。私も娘にランドセルを買ったわ。その頃、女の子は赤で男の子は黒と決まってたけど、この頃はいろんな色があ

るんだね。近所の子たちを見ていたら色とりどりだもんね。

私は自分のランドセルを持ったことないのよ。昔、私と同じ年くらいの近所の女の子がランドセルを背負って学校に行ってたの。当時は風呂敷に教科書を包んで持っていくのが普通だったから、そりゃあ目立ってた。ふたのところに薄いピンク色のユリの花が刺繍で入っててね。今もはっきりと覚えてるから、うらやましかったんだろうね」

そうか、だから、やす子さんの手提げバッグはユリの模様なんだ。

「私ね、ランドセルって子どもにとって特別なものだって思う。勉強することの象徴というのかしら。あ、象徴ってわかるかな。この前、先生に教えてもらったんだよ。すごいでしょ。難しい言葉」

ランドセルは子どもにとって特別なもの――。愛美にはその意味がよくわかりませんでした。「象徴」という言葉も。

「私はランドセルを背負う子どもを見ると、学校に行くんだなとか、勉強がんばってねとか、思う。大人たちは、町の子たちをそんな気持ちで見ているじゃないかな。だからランドセルを背負う子って素敵よ。大切に見守っていたい。

愛美ちゃん、私は文字を知ってから、世の中が違って見えるようになったのよ。愛美ちゃんは、もうほとんどの文字を読めるから、私の気持ちはわかりにくいかもしれないけど。看板とか、表札とか、漢字がどんどん読めるとうれしくて、うれしくて、目がまわりそうなのよ」

やす子さんは、そう言いながら顔を紅潮させるのでした。

「愛美ちゃん、私の学校に興味を持ってくれてありがとう。こんな話、これまで誰にもしたことないのよ。でも、あの学校でみんな一生懸命勉強していることをあなたに知ってもらえてよかった」

そう語るやす子さんの眼差しは、優しさにあふれていました。

愛美は家に帰ってすぐ、国語辞典で「象徴」という言葉を調べました。「それと関係が深い、またはそれを連想させやすい、具体的なもの」

愛美は少しくたびれた自分のランドセルに目をやり、これがその「具体的なもの」なのかなと思いました。

このランドセルは愛美が入学する時に、おばあちゃんが買ってくれたものです。愛美が欲しかったラベンダー色。なかなかお店になくて、あちこち探し回ったよ、とおばあちゃんが話していたことを覚えています。ふたの部分にキラキラのビジューがついていて、友達からうらやましがられました。六年間使って、ビジューが二、三個剥がれてしまったけれど、今もお気に入りです。

きょう聞いた話をひとつひとつ思い返すと、幼いやす子さんが兄弟と奪い合うようにジャガイモを分け合ったり、文字が読めずに困っている様子がありありと浮かびます。愛美は急に涙があふれ、クマのぬいぐるみを抱えるとベッドに頭からもぐりこみました。

月曜日、二週間ぶりに愛美は学校に行くと決めました。

ランドセルのふたのビジューをハンカチで拭くと、朝日が反射してキラッと光りました。えいやっ、と部屋を出て階段を駆け下ります。リビングのドアを開けると、「お母さん、学校にいってきます」と声をかけました。

お母さんは目を見開いて「愛美、本当に？一緒に行こうか」と食器洗いの泡だらけの手でエプロンを脱ぎかけます。

「自分で行けるよ。行ってきます」

愛美は勢いよく玄関を出ると、学校に向かって大またで歩きはじめました。

一年生の時、このランドセルには楽しい一

日がいっぱいつまっていました。六年生になってからは、気持ちが沈んだり、ささいなことが気になったり、勉強する気になれなかったりする。愛美は誰からも理解されない重苦しい気持ちを抱える日々でした。

でも、愛美は今日、ランドセルに新しく（感謝）の気持ちをひとつ、入れることができました。やす子さんの話を聞いて出した答えでした。

校門に松原先生の姿が見えます。「太田さん、おはようございます。待ってたよ」

先生は、笑顔で愛美の肩をぽんぽんと二回たたきました。先生の長い髪が揺れ、グレープフルーツの香りがしました。夏が始まる香りだなと思いました。

上履きが少しきつい。ついこの前までぴったりだったのに、自分の体が成長したのでしょう。同じように私の心も成長できるはず。今はまだ途中で、輪郭がぼやけているけれど、きっと大丈夫。大丈夫。そう繰り返すと、心の中をさわやかな風が吹き抜けました。胸の奥には、からまった問題があることはわかっています。勉強が苦手なこと、走りが遅いこと、字が下手なこと、言葉につまって会話がうまくできないこと、宿題プリントができていないこと。

でも今、大切なものもたくさん手にしています。心配してくれる友達や先生、家族がいること。何より、学校に行くことができて勉強ができること。こんな「当たり前なこと」が、決して当たり前じゃなかった時代があったことを、やす子さんの話で知りました。

愛美は昨日、宿題プリントの裏に先生に宛てて手紙を書きました。

「松原先生、私はお休みの間にやす子さんという八十一歳のおばあさんと知り合いました。やす子さんは小さい時に戦争で学校に行けなくて、大人になっても字を読んだり書いたりできなかったそうです。それで今は夜間中学に通っています。私は勉強が嫌いでうま

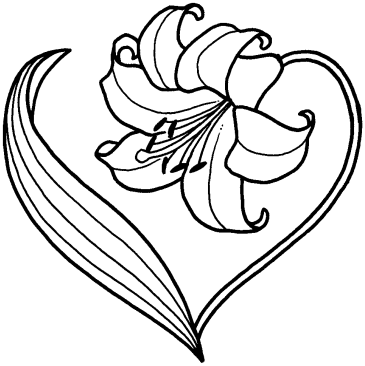
くできないことも多いけど、やす子さんのようにがんばりたいです。私は夜間学校を知ってよかったです」

愛美は思いを文字にしたことで、初めて勉強が苦手なことを自分で認めることができたと思いました。

「自分の思いを文字で書けるって素晴らしいでしょ。愛美ちゃん」

やす子さんの声が聞こえてくるようです。

階段を上がると、六年一組の教室は以前と変わらずにぎやかです。そろそろ一時間目がはじまるチャイムが鳴ります。



《優秀賞・学齢児童生徒の部》

小説部門

# 大切な友だち

兼村　琴菜

私は、私が嫌い。自分に自信がないし、友だちも少ない。そんな私も大きくなったら、明るくなるのかなって思う。でも、それがまさか本当になるなんて、思ってもみなかった。

「はぁ、今日も友だちできなかった」

私は、中学一年生の女の子。私はおとなしくて友だちも少ない、こうやって今も一人で家に帰っている。一年生になって一ヶ月、クラスで私の友だちはいない。声をかけようとしても何と言っていいのかわからないし、それに今さら友だちなんてって思われるかもしれない。休み時間は、いつも一人で本を読んですごしている。

（でも、明日に奇跡が起きて誰かと友だちになれることを信じよう。）

私は期待をふくらませながら、のこりの家までの道を進んでいった。

次の日、私のクラスに転校生がやってきた。

「美野井ねなといいます。みんなと仲良くなりたいと思っています。これから、よろしくお願いします」

教室にパチパチという拍手が起こる。

「美野井さんの席は佐奈さんのとなりね」

「はい」

佐奈さん……。あっ私のとなりに転校生、友だちになるチャンスかも。

「ねなです。あなたの名前は？」

あっ私のことだ。ぼーっとしてちゃだめだ。

「佐奈桃美です」

「桃美ちゃんっていうんだ。よろしくね」

ストレートできれいなかみの毛に、きれいな声おまけにスタイルもいい。でも今、友だちになってって言ったら変に思われるかもしれない。私がどうしようか迷っていると、
「いきなりだけど私と友だちになってくれる？」
私はとてもおどろいた。なぜならこの一ヶ月一度も話しかけられなかったんだもん。話しかけるのは自分からって思ってたけど、話しかけられるのもいいもんだ。
「うん。友だちになるのはいいけど、こんなにおとなしい私にも話しかけくれるの？」
と私が言うと、
「私はただ、みんなと仲良くなりたいだけなの。このたくさんある人生で、いろんな人と楽しい時間をすごしたいだけなんだ」
私は、美野井さんに感動した。そうだよね。たくさんの友だちがいた方が楽しいよね。勇気を持って、話しかけてみよう。
「桃美ちゃん、まだ友だちできてないの」
「うん……」
朝の学校はそんな会話から始まった。昨日、勇気を出して友だちを作ってみようと思ったものの、やっぱり恥ずかしくて、声をかけられなかったのだ。そんな自分が情けない。
「でも、大丈夫。桃美ちゃんは無理しなくていいんだよ。いつかきっと、たくさんの友だちができるよ」
私は美野井さんに助けられたような気がした。
「ありがとう。やっぱり美野井さんは優しい」
と私は言った。
「そう思ってもらえてうれしいよ。友だち、きっとできるからね、またあとで」
きっとできるって言われても、やっぱり自分から声をかけるのか。でも、その日はタイミングをつかめず、結局今日も、新しい友だちはできなかった。

（明日こそは、がんばるぞー！）
そう思いながら私は家へ帰ってきた。でも、今日の宿題は、自分の友だちについての作文！私は美野井さんぐらいしか友だちがいないからじっくりと美野井さんのいいところを思い出して作文を書き始めた。
『私の友だち』
私の友だちは、美野井ねなさんです。美野井さんは、だれにでも優しくて、人の悪口を絶対言わない人です。それに……。
「はぁ、これでいいかな」
私は書き終えた作文を見直して、文字のまちがいがないかたしかめると、明日にそなえて早くねた。
「美野井さんて、どんな作文かいたの」
なんとなく気になった私は、次の日学校でたずねてみた。
「私は、友だちのいいところを全員一つずつ書いたんだ」
「すごい。全員のいいところを見つけるっていいね」
私は心からそう思った。友だちのいいところをたくさん見つけることは大切だと思ったから。
「そう、友だちのいいところやすごいところを大切にすることはとってもいいことだよ」
（美野井さんは、一人一人をとても大切に思っている。私もこんな美野井さんになりたい）
私はそう思った。
でも、私には友だちが少ない。今日も、新しい友だちはできなかった。
「どうやったら、友だちと仲良くなれるのだろう。気になるから、明日美野井さんに聞いてみようかな」
次の日、
「美野井さんは、病気のため、お休みです」
と先生が言うと、教室がざわめいた。先生によると、昨日家でたおれた美野井さんは、病院に行ってそのまま入院になったそうだ。

クラスでただ一人の友だちが美野井さんだった私は、心配と同時に不安がたくさん私の心の中に広がった。でも、このまま暗くて友だちの少ない私じゃ、美野井さんに会っても意味がないと思ったから、私はがんばって友だちを作ってみることにした。何と言えばいいのかわからなかったから、美野井さんに言われた言葉を言ってみることにした。

「いきなりだけど、私と友だちになってくれる」

私はポニーテールでいかにも元気そうに見える子に話しかけた。

「あっ佐奈さん。友だち、私が？　いいよ」

えっと名前は……。花乃音さんだ。思ったより早く友だちできちゃった。友だち作るのって、意外とかんたんかも。私はこのいきおいで、ほぼクラス全員と友だちになった。すっかり明るくなった私は、このことを早く報告したいし、もちろん心配のこともあり、美野井さんがいる病院へ向かった。

「わぁ、大きな病院」

美野井さんは一人部屋で、2階だそうだ。私が友だちができたことを話すと、

「やった。桃美ちゃん、新しい友だちできたのね」

美野井さんにほめられてとてもうれしい私は、

「うん」

と元気に返事をした。

病院の先生によると、美野井さんはあと一ヶ月ぐらいで、たい院できるそうだ。

「よかった～。美野井さんがずっと学校にこられなかったらどうしようかと思ったよ」

目がうるうるしてた私に、美野井さんはあきれたように、

「それはないない。そんなに心配してくれてたんだ、ありがとう。それで、私からお願いがあるの」

美野井さんからのお願いってなんだろうと私が思っていると、

「私、大人になったら、医者になりたいと思っているの。一人一人の命を大切にして、守っていきたいの。だから桃美ちゃんもできるだけでいいから、たくさんの友だちに、一人一人を大切にして行こうって言ってくれない？」

なあんだ、そんなことか。とってもかんたんだ、私は美野井さんにたくさん助けられたから、今度は私が美野井さんの力になりたいな。

「分かった、まかせて、友だち全員にでも言いに行くから」

そう言った私は、その日から、声かけを始めた。最初は、反対の声も多かったけど、だんだん賛成する人が多くなってきた。その中でもとっても良い子は、他の人に声かけをしてくれたから一人一人を大切にするという考えをもたない人はいないと思えるぐらい私の学校はそういう考えを持つ人がふえたと感じた。『一人一人を大切にしていこう』この一言で、こんなに良い考えを持つ人がふえたなんて、私は思ってもみなかったのに、美野井さんは予想していたなんて、すごいな。

「これを新しくできた友だちにも伝えよう」

私は習い事で、じゅくに行き始めて、そこでできた友だちにも『一人一人を大切にする』ということを伝えようと思ったのだ。

「いいね、伝えてあげて」

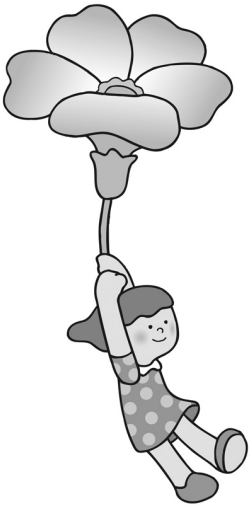
美野井さんがそう言った。

私は、あれから6年たった今、大学生になった。中学校と高校までは、美野井さんといっしょだったけど、大学はちがうから、なかなか会えなくなってしまった。だけど、大学でも私たちは『一人一人を大切にする』ということを伝えてきている。そのおかげか、とてもみんなが仲良くすごせているような気がする。そして今日は美野井さんに会える日。何をしようかなと考えている間に来てしまった。

「あっ桃美っ、もう来てたんだ」

「うん。でも、今着いたとこ」
「よかった。たくさん待たせてたらどうしようかと思ったよ」
話し合いの結果、今日は水族館に行くことになった。そして、イワシの群れを見て、
「このイワシたちは、みんなで協力しているんだね。私たちもこのイワシみたいに協力し合って行きたいな」
と美野井さんが言った。
「できるよ、きっと。みんな仲良くやっているから」
そう私は言った。そうだよ、絶対にできるはず。みんなで協力し合えるはず。
「ねぇ、美野井さん」
「ちょっと待って」
そこで美野井さんが私の話をさえぎった。
「私、ねなってよんでほしいな。ずっと、美野井さんってよばれてたけど、ほら、私も桃美ってよんでるから」
ねな、ねな、オッケー。
「分かった。ねなは、いつまで声かけを続けていくの？」
すると、ねなは、
「どうしようかな。私、そこまで考えていなかった」
そっか、さすがのねなもこのことは考えていなかったのか。
「でも、とりあえず桃美も続けるよね」
ねながそう言った。
「うん。これからも続けていこうね」
水族館を楽しんだ私たちは、次に会う約束をして帰った。私は、ねなに出会っていなかったら、こんなに明るくなれなかった。それに、今は、昔よりもみんなが優しくなった気がする。だから、ねなは、この世界を変えてくれた人。そして、私にはこの六年間願い続けていることがある。それは、
——世界中のみんなが幸せになりますように——
世界中のみんなって思うかも知れないけ

ど、私は、いつかきっと叶うと信じている。このことは、まだ誰にも言ったことがないけど、いつか必ず誰かに話して、願いが叶うように私は、頑張るんだ！



《優秀賞・一般の部》

# 随想部門

## 他人（ひと）ごとではない

山野　敦盛

今、引きこもりが大きな社会問題になっています。

なぜ、そんなことになってしまうのか。その人・その家族の将来はどうなるのか、世の中に引きこもりの人がどれくらいいるのか、どうすれば良くなるのか。いろんな疑問が湧いてきます。

それでも、結局は他人ごとでしょう。

しかし、私の場合はそうも言ってはおれません。なぜなら、私自身が引きこもり直前、いや、短期引きこもりになったからです。

まさか自分がそうなるとは、直前まで思いもしませんでした。

なぜ、そうなったのか。きっかけは他人から見れば、ほんの些細なことかも知れません。でも、その時の自分にとっては、とても大きな問題でした。

また、抜け出すきっかけも、同じように些細なものでした。

私の例がすべての人に当てはまるとは、到底思えません。対象が何十万人いれば、個別の理由が同じだけあるはずです。

それでも、これを書くことで、ほんの少しだけでも、誰かの何かの役に立てば、そんな思いで書いています。

私の場合は、他の例と大きく違っていたことがあります。それは、五十代の半ばを過ぎて急になりました。それまで普通に仕事をしていました。

独身で、養うべき家族はなく、ある程度の

貯えもありました。父は亡くなり、母は入院中で、母自身も貯えと年金がありました。

私が引きこもったとしても、他人や家族に経済的な負担をかけることはありませんでした。

また、周囲への暴力など、まったくありません。逆に言えば、どこにも相談することなく社会から消えることも可能でした。

私は仕事柄、窓口や電話で人と対応する機会がたくさんあります。夜間や休日に連絡が入ることもあります。

そのため、パソコンやスマホで他人とつながっていたいとは思いませんでした。それどころか、せめて自宅に居る時くらいは、他人とのつながりを切りたい。そう考えていました。今もそうです。

それは、引きこもりになっても同じでした。引きこもって、部屋の奥でパソコンでネット社会とだけはつながっている。そんな状況はありえませんでした。

同時に、部屋にいるだけで家族が食事を出してくれるような状況もありませんでした。

仕方なく、夜に近くのスーパーに買物に行っていました。遅い時間だと、知人に会うこともありません。

ただ、仕事に行かずに家にいる。必要最低限の食物を買いに行くだけの生活。

これは引きこもりではない、と言う人がいるかも知れませんが。

人によっては、うつ病も関係するかも知れません。

私自身、医療関係者で、ある程度は病気の知識がありました。引きこもりについての知識も少しはあるつもりでした。

引きこもりの直前、とにかく疲労感がひどくて体を動かせない、動かすとさらにひどくなる、どうしてもやる気が出ない状況でした。病院で内科的な検査を受けました。検査結果は良好で、体そのものはどこも悪くない。

それでも、出勤できなくて、自宅で横になっている。そんな状況が続いて、現状では、職場に迷惑をかける、仲間に心配をかける。それも心の負担でした。

思い切って仕事を辞める。誰も知らないどこかに行って、人生を一からやり直したら。

一人で一日中、いろいろ考えました。

他にも、考えることは、とりとめもないことや後ろ向きなことばかり。

今から思うと、なぜそんなことを、と思います。でも、その時は当然のこととして考えていました。

ある日の夜。ふと、死にたい。そう思いました。何もかもなくなれば、どんなに気持ちが良いか。

明日への希望、目の前の楽しみは何もない。これまで、楽しかった、少なくとも嫌ではなかったことが、辛いことのように思えました。

過去の失敗ばかり思い出して、今の状況では多くの人に迷惑をかけている。そんな強迫観念をゼロにできたら、どんなに気持ちが良いだろうか。

これがうつ病による自殺願望なのだと、勉強してきたことを思い出しました。

さらに、なぜか、刃物の金属部分の輝きが、これまでになく綺麗に見えるようになりました。自殺とは別に、つい手にするようになりました。

発作的に。そんな自分を想像して、これは危ないと冷静に感じました。

幸いにも、ふみ切りませんでした。理由は、それなりに病気に対する知識があって、自分を見失う前に適切な対応が必要だ、と考える余力が残っていました。

今、自分は病気になりかけている、もしかしたら、病気になっているという自覚がありました。このままではまずい、さらに悪化するかも知れない。

一まず、精神科を受診しました。

当時、母が精神病院に入院していました。

精神疾患は手遅れになるのが、とても悪い。病状を悪化させて、長引かせる。患者の家族として、痛感していました。

ひきこもりの原因は、上司との考え方の違いでした。

職場では、何かトラブルがあると、上司に相談するシステムです。上司とうまくいかない場合は、さらに上と相談するシステムはありません。

あえてそうすることも可能でした。でも、それはできませんでした。

私は薬剤師として病院に勤務しています。所属は薬局です。

それぞれの部署は、医師・看護師・技師などそれぞれの免許を持って仕事をしています。一般事務として別の職場への配置転換はあるかも知れませんが、可能性はほとんどゼロ。転勤もありません。退職するしかないのです。

上司との考え方の違いは決定的でした。

薬局では、薬の品質を確保するために、夏になれば上司の指示で、必要以上に冷房を強くしていました。それでいて、上司はそこで仕事をしません。

寒さによる体調不良を訴えても、「人より薬が大切」の一点張り。

また、上司は薬剤師の人数を増やすことに異常に執着していて、それが最大の目標でした。

そのために、仕事の手を抜け、他部署に迷惑をかけろという指示でした。

私は、力不足を承知の上で、それでも納得できる仕事をしたい。それは、患者や家族のため、病院のため、世の中のため、何より自己満足のため。

そのことで、上司を越えて、もっと上と相談すればどうなるのか。

薬局全体の評価が下がって、真面目に頑張っているメンバーに迷惑をかけてしまう。

転勤・配置転換がない職場で、後々の人間関係は、どうなるのか。
ためらいしかありませんでした。
ここを辞めて、他の病院で働いてみよう。そう思って、よそを見学に行きました。
しかし、そこは、メンバーが真面目に精一杯仕事をしていました。
心にわだかまりを抱えた自分が、はたして勤まるのか。職場が違えば、扱う薬も違います。はたして、今の私に、一から勉強する気力・能力があるのか。
他で働く元気も残っていないことに気づきました。その日から、出勤できなくなりました。
抜け出すきっかけは、弟が旅行に誘ってくれたことです。
それまで、ストレス解消にランニングをしたり、外食に出かけたりしていました。引きこもってからは、それもなくなりました。
さらにストレスがたまる状況でした。

ある日、弟が旅に誘ってくれました。電車やバスではなく、弟が運転する車で。
朝早く出て、遅い時間に帰る計画でした。近所の人に会うこともありません。
どこに行くのか決めることなく、高速道路を南へ南へ。車の中で、どんな話をしたのか覚えていません。
知らない街にたどり着いて、客のいないひなびた食堂に入りました。なぜか、心も体も元気で、すんなり歩けました。
「どこか近くに名所はありますか」
うどんを食べながら、高齢の店員に聞きました。
「紀三井寺があります。桜の名所です」
そんな話だったと思います。
頑張って、急な石段を上って、何気なく振り返りました。桜の花が咲いていて、枝と枝の間から遠くに海が見えました。
元気だ、そう実感しました。
機械がない時代に、こんな急坂に大きな石

段をつくるのは大変だったろうなあ。おかげで私もここまで来れた。そう思いました。

それから何度か旅をしている内に、以前のように元気になりました。また職場に行きたい、仕事をしたいと思えるようになりました。

久しぶりの職場は、いつものまま。周囲は何も言わず、これまでの三十何年と同じでした。それこそが何よりの気遣いでした。

《優秀賞・学齢児童生徒の部》

# 随想部門

## 「普通」とは

北尾　大珠

「普通」とは一体なんですか？

国語辞典で改めて「普通」の意味を調べてみると、「ほかと比べて、とくに変わっていないこと」と書いてあります。

この言葉を人の外見や行動、性格を表すのに使う時、何も考えていない人が多いような気がします。「こんなん出来て普通」「普通の子は、こんなことしない」など、よく耳にします。この「普通」という言葉が、言われた人を傷つけたり、苦しめたりしていることがあるということを、言っている人は、気づいているのでしょうか。この言い方だと、「あなたは普通じゃない」と言われているみたいに聞こえてしまいます。

一人一人ちがう生き物なのだから、ちがっていて当たり前です。自分にとっては「普通」でも、相手にとっては「普通」でないことはあります。見た目には分からない、見えない障害がある人もいるかもしれません。

同じ場所にいたり、同じ物を見たり、同じことをしていると、自分とちがう人に対して、「なんで出来ないの？」「なんでわからないの？」「なんでそんなにおそいの？」と、口に出さなくても、心の中で思ってしまうことがあると思います。こう思うのは、自分が「普通の人間」で、相手が「普通じゃない人間」と、少しは上から目線になっていると思います。「普通」とは、だれかが決められるものですか？

自分を大切にしたいのは当然で、でも、本当に自分を大切にしている人は、他の人も大

切に出来る人だと思います。だから、こういう時は、「こうすれば出来るよ！」「どこがわからない？」「あと少し、がんばって！」と言える人間に、ぼくは、なりたいです。

同じ人間なのに「普通じゃない」ことなんて絶対にありません。ぼく達は、「普通」という言葉を決して、「差別」として使ってはいけません。傷つくのは言われた人だけではなく、その人の家族も同じように傷つけることになるということを、忘れてはいけないのです。

ぼくは、人に対して「おたがい様」という気持ちでいたいと思います。そしてぼくが助けてもらったら、これからも、「ありがとう」と感謝の気持ちを、ちゃんと伝えることが出来る人でありたい思います。

《優秀賞・一般の部》

詩　部門

# 母であることは忘れない

児玉　千佳

デイサービスどうだった？
何ってことないよ。
歌、歌ったって書いてあるよ。
そんな気もする。

おやつ食べた？
食べたかな。
バナナの皮、捨ててあるねえ。
じゃあ、食べたのよ。

またパッド外しちゃった？
覚えてない、無意識でしてるのよ。
服汚れちゃうでしょう、取らないでよ。
できない……（シクシク）

何作ってるの？　なんか手伝うことある？
大丈夫。休んでてー。
役立たずばあさんになってもうた。
八十過ぎてそんなに活躍しなくていいよ。

あ、しんど、あ、しんど。しんどばあさん。
しんど、しんど、シンドバットー。
はよ死なな。あんたらに迷惑かけたくなーい。
迷惑かけてないよ、全然。

行ってくるね。
どこ行くの？　会社？
今日は土曜日だから会社はないよ、ヨガ。
行ってらっしゃーい。気を付けてね。

《優秀賞・学齢児童生徒の部》

詩　部門

# 言葉のちから

阪口　貴恵

あ・い・う・え・お・か・き・く・・・・

この、一つ一つの文字に意味はないけれど、いくつかの文字が集まったとき、

言葉のちからが誕生する。

それは、文章としてかもしれないし、

一瞬の話し言葉かもしれない。

何かの形で生み出された言葉は、だれかを勇気づけたり、だれかを明るい気持ちにしたりする。

しかし、

ときに言葉は、人を傷つける。悪気はなくても、ときどき人を傷つける。

そのとき、人は言葉がきらいになるかもしれない。

でも、

もしかしたら、その言葉が、だれかを変えるきっかけになるかもしれない。その人が今までの自分と向き合って、見直して、他の人の気持ちを考えることができるようになるかもしれない。

そして、

この、人を変えるちからが、言葉のもつ、最大の力だと私は思う。

この世に生み出され、あふれかえっている言葉たちへ

私たちに、人の気持ちを考えて、言葉を選ぶことの難しさや大切さを教えてくれて、伝えてくれてありがとう。そして、私たちが、変わるきっかけを作ってくれてありがとう。

《優秀賞・一般の部》

# 創作童話部門

## 自販機トムと仲間達

田中　肇

「ガチャン」短い音をたてて、自販機の受け皿に缶が落ちて来た。

「あれ、違うぞ」

オレンジジュースを選び、ボタンを押したはずなのに、見たことのない、まっ黒なデザインの缶だ。ケンタは不思議な気持で手に取った。缶には、赤く太い文字で「いじめゼロ」とだけ書いてあった。これまで、カフェインゼロ、カロリーゼロ等の缶は見たことがあるが、「いじめゼロ」は見たことがなかった。突然、自販機から声が聞こえた。

「僕は自販機トム。ケンタ君は友達にいじめられて困っているね。その飲物は少しだけ君をなぐさめるジュースだよ」

ケンタは驚いた。

「僕のことをどうして知ってるの？」

「ツトム君達からいじめにあっていることは、町中の自販機の仲間達から、情報が入ってくるんだ」

実際、ケンタは毎日のように、いじめにあっていた。学校への行き帰りは、ツトム君達三人のカバンを持たされてもいた。三人は手ぶらで、ふざけ合いながら歩き、ケンタは何も言わずに、汗をかきながら遅れて歩くのが常だった。他にも、買ったばかりの筆箱を取られたり、洋服を汚されたりといったいじめ風景を町中の自販機は見て、情報交換をしていた。当然、自販機トムにも、そのいじめ情報は届いていた。

「ケンタ君はツトム君達にいじめられていることを家族や先生に話したかい？」

自販機は、自販機がない家や学校の中のことは分からないので尋ねた。
「話したよ。でも、お母さんは、『ツトム君は近所でも評判の面白い子だから、ふざけているだけよ』というし、先生も、『ケンタ君がいい子だから、焼きもちをやいているのよ』、どちらも僕の言うことをちゃんと解ってくれないんだ」
自販機トムはじっと聞いていたが、
「そうか、君はやることはやったんだね。よし、僕達自販機は君のいじめがなくなるために協力しょう」
自販機トムはケンタに約束した。

次の日から、町中の自販機は、どのボタンを押しても、ケンタへのいじめを伝える缶が出て来た。
それを知ったツトム達いじめっ子は怒り、手当たり次第に自販機を壊して回った。自販機トムの仲間が次々に故障していき、いじめ情報も伝わらなくなった。
自販機トムはケンタに頼んだ。
「ケンタ君、仲間の自販機が壊され続けて困っている。闘ってくれないか?」
ケンタは、これまでいじめっ子達に「やめてくれ」と叫んだことは一度もなかった。が、いじめが広がり、自分のせいで傷ついている自販機達のためにもケンタは決心した。
「もう我慢できない。**僕は闘う!**」
初めての決心と不安で胸のドキドキ音が自販機トムにも伝わった。
自販機トムは言った。
「君に勇気の出る魔法の飲物をプレゼントするから、自販機の後ろにある赤いボタンを押してみて」
押すと、赤い缶が落ちて来た。黒い大きな文字で「怒(ど)カン」と書いてあった。
次の日が実行の日だった。
家を出る時「怒カン」を飲むと「闘うぞ」という気持ちが強くなった。

いつものように、ツトム達三人に会うと、「ケンタ、今日も俺たちのカバンを学校までしっかり運べよ」

「いやだ！　自販機いじめもやめろ！」

初めて抵抗するケンタの声は少し震えていたが、いつもと違うケンタに三人は驚いた。

「どうした。言う事を聞かないと痛い目にあうぞ」

ツトムが、ケンタを突き飛ばした。尻餅をついたケンタは立ち上がり、ツトムに体当たりしたが、すぐに、三人がかりで馬乗りにされ、殴られ続けた。

「こら！　何をしているんだ。一人に三人もかかって卑怯だぞ」

大人の人がケンタから三人を引き離した。ケンタの服は破れ、ほほや唇から血が出ていた。周りに人々が集まり、大騒ぎになった。

自販機トムに、ＴＶ局に置かれている自販機から「ケンタ君がＴＶに出て、インタビューを受け、自分へのいじめや壊された自販機のことをしっかりと話していた。もうイジメはなくなるだろう」と連絡が入った。自販機トムは、がんばったケンタに早く会いたいと思った。そして、教えることが一つあった。ケンタにプレゼントした魔法の飲物「怒カン」は自販機の横にある水道の水だったことを。

令和元年度　人権問題文芸作品

『のじぎく文芸賞』

発　行　令和元年12月
編　集　公益財団法人兵庫県人権啓発協会
〒650-0003
神戸市中央区山本通4丁目22番15号
兵庫県立のじぎく会館内
TEL 078（242）5355
FAX 078（242）5360
発行者　兵　庫　県
公益財団法人兵庫県人権啓発協会
印　刷　㈱興正社

人権文化をすすめよう